

会長就任挨拶

— 百年時代を生きる —



中西 喜彦

今年5月例年のように編集会議を開いて「炉ばたセイ談」の発行について協議することに致しました。早速、澁谷さんに連絡したところ、奥様が対応されてどうも澁谷は体調が思わしくないので今後のことは宜しくとのことでした。

そこで、ワクチン接種などの対策後、例年より一ヶ月遅れで入院院邸に集まり、今年発刊の可能性について協議しました。重朝庵主は今年9月90歳を迎えられますが、大変お元気で「今からは百年時代だ、是非続けたい」

とのことでした。そこで、編集長の小生が会長役をお引き受けし、下土橋さんを編集長に、編集担当の方に入来院久子さんに参加して頂き、思いを新たに続行となった次第です。

振り返ってみますと、入院院貞子さんがお亡くなりになったのが平成23年5月ですので、今年で10年目を迎えます。丁度お亡くなりになった年の4月末に原稿催促のはがきが来ていました。葬儀後、重朝庵主に会誌発行をどうされますかとお尋ねしました。「続けましょう。貞子の供養にもなる」ということでした。そこで、故桐野三郎元会長と相談しながら、「貞子さんに再会」を旗印に、初年は沢山の弔辞、貞子さんの略歴や著作の題目などを採用しました。以後3回忌、7回忌、重朝庵主の米寿のお祝いなどを収録してきました。また論客達の文を掲載できました。

大変残念なことに前会長の澁谷繁樹さん

が7月にお亡くなりになりました。本誌1号からの論客で発刊当初からの雰囲気を漂わせて頂きました。先輩を差し置いての早すぎる死に、澁谷さんが生前貞子さんに送ったお別れの言葉を抜粋して、澁谷さんへのお別れの言葉にしたいと思います。

「信州東京入来に地球、どこいたってオヒメサマ なにをしようがみんな得心 アノネエエ おっとりゆるやかミヤビヤカ 落花世の常わかるけど さびしいよテイコサン」

このお別れの言葉で、「信州を鹿児島にオヒメサマをオボツチャマに、テイコサンをシゲキサン」に変えてみました。

好漢逝く。合掌。

さて、表題に戻りますが、色んな意味で、

これまで人類が経験したことのない時代に突入しました。縁のある人々が本誌に集い色々な知恵を交換出来ることを期待いたします。

また、今年10月に「入来花木会」を入来院久子会長のもと再興されます。800年近い歴史を持つ入来麓武家屋敷地区の美観や景観を大事に保存し、入来院家の財産である茅葺門や入来文書を活用し、麓地区に残る文化遺産を広く世間に知って頂くというものです。最近の歴史研究は文書だけでなく、神社、仏閣、その付属施設などの価値が見直されています。こちらの方も新体制にご理解とご協力をお願いします。



澁谷繁樹さんを偲んで



故入院貞子さんが平成17年（2005年）秋に『炉ばたセイ談』第1号を創刊された当初から『炉ばたセイ談会』のメンバーであり、初代会長・故桐野三郎さんの後を継いで平成29年（2017年）から第二代目の会長をして頂いた澁谷繁樹さんが令和3年8月20日に永眠されました。満69歳でした。

澁谷さんは昭和27年（1952年）生まれ。早稲田大学政治経済学部政治科卒業。南日本新聞社入社後、社会部、川内支社、文化部、宮之城支局などに勤務。平成12年（2000年）編集部長。平成15年（2003年）から編集局編集委員。

平成21年（2009年）3月1日から平

成25年（2013年）3月末までの4年間、南日本新聞社の読者室長として、MBC（南日本放送）テレビで毎週金曜日の午後6時54分から放映の『読者室から』という番組に出演、県民なら誰一人として知らない人はいない、金曜日の夕方の顔になりました。『四百十字の裏で』というエッセイに次のようにあります。

午後六時五十四分前、鹿児島県の民間放送の一局で、一週間に一回報道随筆を担当している還暦を過ぎた新聞記者は、時刻ギリギリまで、何をしゃべるか、迷っていた。あらましは原稿にして事前に送信しているけれど、口を開いたらゼンゼン別の話になってしまう場合もある。

出番が来た。「こんばんは」とスタジオのアナウンサーに呼びかけられて、二分間、字

数にして四百三十、テレビ随筆が始まった。
 (中略) 放送で引用する俳句類は鹿児島の人
 がつくった作品に限っている。今回は随筆内
 容に即したわかりやすい俳句だったかなと考
 えながら、最後の決まり文句の「読者室でし
 た」につないでいく。『炉ばたセイ談』No.
 8号(平成24年秋発行)より抜粋)

南日本新聞社を退職後は、鹿児島県NIE
 教育に新聞を推進協議会事務局長として
 ご活躍されました。

『炉ばたセイ談』との出会いについて、会
 長就任挨拶で触れておられたので、以下に全
 文を転載いたします。

セイダンと関係ができたのは、入来院貞子
 さんから襲われた、が理由になる。

新聞社の文化部のペイ。ペイだったころ、貞

子さんは新聞社によく出入りしていた。文化
 関連の催しでもしよっちゅう顔を合わせたけ
 れど、知性は屹立、弁も立つブンカオバサン
 だなと、あまり近づかないようにしていた。
 だいたいにしてからが、公にしる酒の席にし
 ろ、いろいろ談義は苦手で、滔々たる教養の
 流れには溺れてしまう。

敬遠しているとナゼカ向こうから近づい
 てくる。大学一年生時代のスキー小屋で、ウ
 イスキーで酔っ払った四年生の素敵な女セン
 パイから「シブチャン、もてようと思つたら
 ね、無視するの、知らん顔してりやにじり寄
 ってくるんだから。それと、相手が団体の場
 合は、コンパなんかだけどね、一番さえない
 のに優しくするの。そうしたら、一番いい女
 が手に入るんだな、これが」と、教えてもら
 ったのを思い出す。

そうそう逃げ回ってばかりもいられない。

たまにはおつきあいするうちに、大学の先輩だと知れた。加えて、夫君も同じ大学、しかも同じ学部の大先輩だと判明した。

十五代沈壽官氏との出会いとよく似ている。鹿児島料理屋、顔も知らないのに論争になり、表で決着をつけようと腰をあげかけたら、氏が「ところで、はんな、大学な、どこな」と聞いてきた。「ワセダ」「おいもじやが、学部は」「セイケイ」「じゃつとなあ」。言い争いはどこかに行つて、今日は呑んど、オウ、となつてしまった。

入来院夫妻との場合も、先輩後輩とわかつた途端、頭があがらなくなつた。セイダンを発刊したい、ついでにはアナタも会員にするから、とテイコサンから申し渡され、新聞記者としてひとつの雑誌に所属するわけにはいかない、取材は公平が原則だからと抵抗したのに、一顧だにされず、もう決めたの、と押し

通されてしまった。

桐野三郎会長逝去を受けての新会長選びも同じだった。髪の毛がなくなつた六十五歳にもなつて、情けないといつたらありやしなけれど、大先輩のオマエがせいとの一言に、任でもないしガラでもない抗弁を口ごもつただけで、押し切られた。

知性は薄っぺら、人格頼りなく、覚悟もフワフワ、でも、一つだけは自慢できる。大先輩をはじめ会員諸氏がいずれ劣らぬ宝石ぞろいで、会長がフワフワでも、なんの心配もない。

それにね、テイコサン、そもそもはアナタが原因なんですからね、アナタに襲われなきや新会長だつて、なかつたんですから。

以上、『炉ばたセイ談』No13号(平成29年秋発行)よりの転載でした。(下)

嗚呼、一杯一緒にやりたいね！

入来院重朝

澁谷君。君が病に臥せていることは知っていた。どういう経緯であったかは覚えていない。

君が、ぼくの妻貞子の葬儀の折、重朝さんのときには僕らが葬儀委員長を務めますと云っていたのを覚えている。たしか沈壽官君も一緒にその時はいた。それが何たることか、君が先に逝ってしまうとは。人の命はママならない。

ぼくは昔、小学校六年生の卒業の年、丁度中学入試の春、両方の肋膜炎、ついでに腹膜炎を患い九死に一生を得た。その時、夢現に見た三途の川が、オトナになって現実に見たインドのインダス川にそっくりだったことに、

一寸びっくりしたものだ。

さて、生きていろいろ経験するが、すべて前世の約束ごとのように思われる。ぼくもとうとう今年九月で満で九十才になる。全く無為に生きてきたような気分である。しかし、思えばいろいろな人と知り会った。何よりも今は亡き妻が恋しい。彼女に知り会えたことが何よりの私のしあわせであった。

そして澁谷君。君にはいろいろお世話になった。思えば泣きたくなるよ。嗚呼、一杯一緒にやりたいね！

人の一生は、それぞれ違う。皆自分だけの一生なのだ。文字通り有難いことだ。感謝あるのみだ。合掌。(炬ばたセイ談庵主)



一生忘れない大切な思い出

入来院久子

私が澁谷さんに初めてお会いしたのは第1回「入来薪能」が開催された日。1999年の夏だった。薪能が始まる前に、来賓の方々が我が家に集合していたのだが、私は母から任命された司会担当のために、当日に手渡された原稿とにらめっこしていた最中だった。

浴衣姿で団扇を片手に現れた澁谷さんの粋な姿に「田舎にもこんな素敵な紳士がいらっしやったのか!」と内心感動したのを覚えている。後から、ローカルテレビの報道番組でコーナーを担当し出演している方だと知り、なるほど!と納得したものだ。

本当に澁谷さんはダンディでカッコよかった。声も素敵でお喋りの内容も楽しかった。

両親の大学の後輩というだけで、嫌な顔もせずに我が家の用事を頼まれてくださる優しい方だった。

大のお蕎麦好きで、父の米寿のお祝いにも我が家のキッチンで美味しい蕎麦を茹でてくださり、年末には年越しそばをわざわざ出向いて届けてくださったことは一生忘れない大切な思い出だ。

澁谷さん。闘病中にお見舞いできなかったことを父と共に深く悔やんでいます。

澁谷さんには直接感謝の気持ちをお伝えしたかったのに。こんな文面で大変申し訳ありませんが、心よりご冥福をお祈りしています。合掌



心より「冥福をお祈り致します」

下土橋 渡

てメールで送る。そうすると、

謹啓 結構です。

毎度お疲れ様です。

深謝多謝、恐惶。 澁谷 梓

入来院貞子さんが不慮の事故で亡くなられた平成23年の秋発行の第7号から中西喜彦先生と二人で編集を担当することになった。一年目は試行錯誤の年だった。中西先生は鹿児島市に、私はさつま町に住んでいたのですが、距離的にほぼ中間にある鹿児島市郡山町のファミリーストランの席を借りて編集作業を行った思い出がある。

2年目にはインターネットのメールでやり取りしながら編集を進める方法を試みた。いわゆるいま流行りの『リモート』である。それが上手く行くと、平成25年から澁谷さんにも編集担当に名を連ねてもらった。

編集したものをPDFファイルに落とし

などと、返信メールは決まってシンプルだった。それでよかったのである。何せ、新聞社の編集部長をされ、編集局編集委員をされた方に目を通してもらうのだから、自信がつく。コメントは短かったけれど、編集後記はいつも、あのダンディな文章で、割り当ての紙面いっぱい書いてもらった。

入来院さん宅で編集の打合せがあると、私たちも美味しい蕎麦をご馳走になった。

澁谷さん、ありがとうございます。

心より「冥福をお祈り致します」。

(炉ばたセイ談編集担当)

ありがとう。澁谷 繁樹さん



十五代 沈 壽官

最初に会ったのはいつだっただろう？
日時は忘れたが、その時の事はハッキリ憶えている。

フグ屋のカウンターで飲んでいた私が、店の親父にこう言ったのだ。

「大将。今朝の南の社説読んだかい？昨日の社説も、一昨日の社説もてんでバラバラで何を言いたいのかさッパリ分からん。あれじや論説委員の投稿欄だな。」

社是ってヤツが全く無い新聞社だ。」

大将は黙って聞いていたが、カウンターの隅に座っていた男が、ギョロリと僕を睨みつけて「おい、文句があるなら幾らでも聞いてやるぞ！」と凄んだ。

それが澁谷 繁樹との出会いだった。

大将が「沈壽官の息子だよ」というと、「ほー、じゃ早稲田か。後輩だな」とニヤリと笑った。

こちらも「あ、先輩ですか。失礼しました。」と頭を下げた。

「隣に来いよ」と言われて、「俺も時々そう思うんだよな」と言って破顔一笑。

その日から澁谷 繁樹は僕の兄貴になった。

思い出は山のようにある。

登り窯に付き合ってもらった事、一緒に韓国に行った珍道中、川内支局長の頃は、二人で温泉三昧。

教えてもらった歌は数多い。全て女性歌手のものだった。

南日本新聞の記者のくせに、NYタイムスの記者の様だった。

タバコは止めると何度も言ってみたが無駄だった。

いつも「一輝、一輝」と呼んでくれ、悲しい時も嬉しい時もそばに居てくれた。

そういえば、叱られた事が、一度だけある。

ソウルのホテルに泊まり、部屋で仕上げの酒

を飲んでそのままゴロリ。

朝、目が覚めて僕がシャワールームから出て来ると「馬鹿野郎！」

12月の雪の夜に窓を開けて寝る馬鹿がどこにいるんだ！」

確かに澁谷さんのベッドの隣の窓は開いていた。

「何言ってるんだよ。自分で開けたんだろ！何で俺が」そう言うと、「そうか、ま、そうだよな」と苦笑い。「人のせいにするんじゃないえ！」って怒鳴ると「ごめん、ごめん」って大笑い。

兄弟の様に思っていたが、病魔は兄貴に目をつけた。

コロナの中、見舞いにも行けず

時々携帯で連絡を取り合うだけになった。

「お話しができません 息切れと仲良しです」

これが今年の3月17日夜10時47分の連絡だった。

「頑張れ！」と打ち返したら

「お互いでしょ」って。

最後、出棺だけ見送ろうと外にいた僕に長男さんが「沈さん、長男の鉄一郎です。親父の最期の顔、見てやってくれませんか？」と、言われた。

あー、この子が澁谷さんに、「子供が出来ました。学校辞めて働きます」って言った子か、と思ひ、その立派な姿に従った。

蠟人形のような死に顔。

言葉が出ずに涙が止まらなかった。

奔放に生きた男だと思う。

ただ、本当に優しい男だった。

そして今、天上の人になった。

ありがとう。

本当に良くしてもらいました。

僕はもうしばらく、生地獄を這い回ります。

出会えて幸せでした。

ありがとうございました。

合掌



令和三年の夏

入来院 重朝



今年も高校野球の季節がやって来た。

各県代表が夏、甲子園にやって来て、勝負する。テレビのおかげで、みていてあきることがない。全くうまいものを発明したものだ。日本人は天才である。

各県代表は皆いい顔をしている。日本男児ここにありというおもむきである。

今、戦争がないので、オトコの子はいわゆるハレの場がない。昔は、男子は、いっぱしのオトコは五体満足であれば兵隊に採られた。つまり世界は弱肉強食の時代であった。今はどうか。本質は変わらない。鉄砲相打つ斬壕

戦の時代ではなく、今はボタン一つ相打つ顔の見えない戦争である。人類が生きのびている限り、当分平和は世界に訪れない。つまり人類が皆日本人化しない限りである。

日本人はなぜ皆いい顔をしているのか、つまり影がないのだ。心に鬱屈するものがない。あいつに勝とうとする卑しい顔ではない。勝負は一時のモノ。決まったあとは礼に終わり、サワヤカに別れる。

日本人は勝負ゴトが大好きである。囲碁将棋を見ていればよくわかる。外人が争いごとが好きなのは、昔狩りが生業だったからだろう。いい狩り場を取ったものが勝ちだったのだ。

日本人は豊かな自然環境に恵まれ、しあわせであった。天照大御神からずっと我が国には女子が世界の主であった。それは今でもずっと続いている。家のサイフは女房殿が握っ

ているのだ。こんな国は世界にはない。モメ
ゴト争い事はきらいである。

世界中がだんだん日本化しつつあるよう
だと私は思っているが、ホントにそうなるこ
とを願っている。

(炉ばたセイ談庵主)



庵ノ坂の石敢当 (伝統的建造物群保存地区・入来麓)

入来花水木会の再興

入来院 久子



れられない思い出だ。

今から11年前、2010年の夏の終わり。母が代表を務める『入来花水木会』主催の「入来薪能」第7回公演が入来麓清色城跡（入来小学校・校庭）で開催され、観世流鍊仙会

の若松健史先生が人間国宝の錚々たる楽師たちを引き連れ、若松先生自ら前シテを務めてくださった「巴」の厳かな舞台を、当時私は一番後方の音響席から眺めていた。

夕暮れに城山に向かつて雁が埒に飛んで帰る中、美しく響き渡る鼓や笛の音で幕を開け、だんだん闇が深くなると揺らめく篝火の中で繰り広げられた幻想的な能舞台は一生忘

「入来薪能」は1999年に第1回が開催され、その時から私は母に頼まれて音響席でマイクを握り司会を担当していた。能舞台を見たのはその時が初めてで、演目の能や狂言の説明や難しい先生方のお名前を発音も含め間違えずに読み上げなければならず、普段緊張などしない私が、この時ばかりはとても緊張したのを覚えている。

鹿児島だけでなく全国から「入来薪能」を鑑賞しに入来麓に来客があり、鹿児島市内からの送迎バスも特別に手配しての大イベントの舵を取った母。私はそんな母を心から尊敬してやまない。

2010年の「入来薪能」を終えたひと月後に突然、若松先生が出血性心不全で他界され、翌年の春に後を追うように、母も不慮の

事故で逝ってしまったので、「入来薪能」は『入来花水会』もろとも自然消滅してしまった。

両親が東京在住の頃に2人の謡曲の先生でもあった若松健史先生なのだが、天国で母が若松先生と出会えていたらまた謡を習っているかもしれないと想像すれば楽しい。しかしながら、母は我が家の倉庫に眠る「入来薪能」の檜舞台のことを天国で気にしているのでは？と最近想像したりもする。

父を世話するために2017年の暮れに入来麓に移り住んだ私だが、2年ほど前からご近所に素敵なお友達もでき、麓の生活にも慣れてきた矢先に入来麓伝統的建造物群保存地区保存会の役員となり、また同期に薩摩川内市伝統的建造物群保存地区保存審議会の委員に選出されて会合に参加してみても、色々考えさせられることが浮上してしまい、どうし

ても両親の愛する入来麓を大切にしたいという意思が強くなり、今年2021年の初夏に長女の私が母の意志を引き継ぎ『入来花水会』を再興する運びとなった。

正義感と責任感は一入倍あると自負するが、なにせ子供頃から忙しかった母の代わりに家事や兄弟たちの世話をするのが第一の私の役割で勉強は二の次でよかったので、母の百分の一ほどの知識しか持ち合わせていない私である。歴史にも疎く興味も無かった私が目撃して母の立ち上げた『入来花水会』を汚すことなく運営していけるのか、今更ながら不安ではあるのだが、嬉しいことに会員に名を連ねてくださった方々が皆さま素晴らしいので、きつとしっかり補佐して下さると図々しく信じている。

この世は縁だ！出会えた縁を大切に生きていけば、きつと天国の母も力を貸してくれ

るのではと、超楽観主義の私は『入来花水木会』の未来は明るいと信じて疑わない。なので、皆さま新生『入来花水木会』を何卒どうぞよろしくお願いいたします。



第7回入来薪能『巴』、2010年（平成22年）8月28日
前シテ（里女）・故若松健史氏（重要無形文化財総合指定）

茅門のある町へ

〜 鹿児島帰省

山本 洋子



来年に大学受験を控えた娘の希望の大学が鹿児島大学の天文学科ということで、受験の前に一度大学を下見したいとの娘の希望もあり、コロナ禍ではあったが、久しぶりに父と姉の顔も見たいし思いきって娘と中学一年生の息子連れて帰省することにした。

母が急逝して早いもので十年が過ぎ、四年ぶりの帰省となった。姉に連絡すると福岡に住む甥の息子二人も予定を合わせて鹿児島へ来てくれるという。甥の息子は姉の孫にあたるわけだが、上の子が中学二年、下が小学校六年で、ちょうど私の息子が真ん中に並び、小さい頃から夏休みになると姉のお世話にな

って遊んでもらっていた仲なのだ。

早割で飛行機のチケットを確保していたものの、出発の三週間ほど前に航空会社から新型コロナウイルスの影響に伴う需要減退等によりやむを得ず欠航という案内のメールが届いた。早速、姉に連絡し半分帰省を諦めていたものの、夫から格安航空会社なら運航しているのではないかというアドバイスを受け、その日の晩に調べてなんとか往復のチケットを予約することができた。それから台風が三つも同時に発生したり、本当に出発するまで気が気でない日が続いた。

そしていよいよ出発当日、台風も去った後で羽田空港は快晴であった。無事に飛行機は離陸し、定刻より少し早い十七時二〇分に鹿児島へ到着した。

空港から実家までは空港バスに乗り最寄りのバス停まで姉が車で迎えに来てくれるこ

とになっている。バスの乗車切符を三枚購入し、時間を確認するとなんと一六時丁度発の次が一九時の最終となっている。停留所の案内をよく見ると、何本か白く消されている。どうやらバスもコロナの影響で本数を減らしているようだ。

仕方ないので、帰りの飛行機が朝早いこともあり、先にお土産を物色して時間を潰すことにした。姉に連絡を入れると、昼間に福岡から来ている姉の孫たちは首を長くして夕飯も我慢して待つてくれているという。バスに乗り込んだ頃にはもう景色も真つ暗であった。

次の日から九州地方は大雨に見舞われた。娘は二日目の朝、雨のなか、バスを乗り継ぎ鹿児島大学周辺を下見したのち、受験生ということもあり、三泊して東京へ帰った。私と息子は一週間滞在したのだが、稀にみる雨続きで、私が外出したのは二度ほど姉の買出し

の付き添いにAコーブまで行ったのみである。息子たちに至ってはほぼ毎日、各自が持参してきたゲーム機とにらめっこするか、トランプでカードゲームをして過ごしていた。

そして、今だから帰省したと言えるが、帰省中は決して表にばれることのないようにとのことで、来客があると、まるで戦時中の戦犯扱いのように潜伏して息をひそめていた。

なにもかもコロナウイルスの出現で本当に世の中と意識が変わってしまった。コロナ禍で大変な思いをして帰省し、大雨で散歩もままならず、姉や甥たちや息子と輪になって遊んだ大貧民やセブンブリッジも子供たちが大人になったときに、それはそれできっと楽しい思い出として刻まれていることだろう。

これから先も未知なるウイルスとの闘いや天災などどうあがいてもどうしようもないことが続くに違いない。それでも人間は生き



ていかなければならない。どんなに絶望的なことがあってもそこから正しく生きる意味を見出していかなければならない。

— アウシュビッツで通ずる強制収容所を体験した心理学者のヴィクトール・E・フランクルの「夜と霧」を読みたくなった。



入来麓（重要伝統的建造物群保存地区）の玉石垣

九・一一直後の米国単独渡航

中山とし子

(元日本語教師)



夜十一時十五分のテレビニュース速報を見ていた時、ニュージャージー州ピッツバーグ郊外で、ユナイテッド航空機が爆発墜落炎上。後に「九・一一」と名付けられた大惨事のちようど一か月後に、一人で渡米を実行した、その時の記録の一部です。】

【二〇〇一年九月十一日(火曜日)、ニューヨーク、十一日朝八時四十六分(日本時間十一日夜十時前) アメリカン航空旅客機ボーイング757が、マンハッタンにある世界貿易センタービルのツインタワー(一一〇階建て)のうち、ノースタワーに突っ込む。その18分後、ユナイテッド航空175便がサウスタワーに突っ込む。続いて、ニューヨーク十一日朝十時前(日本時間十一日夜十二時前)三機目のアメリカン航空77便がペンタゴンに突っ込んだ。更に続けて、日本時間十一日

耳の横で何かうるさいものが唸るので目を覚ました。エンジン音だった。徐々に自分がアメリカ行きの飛行機の中にいることを自覚する。三連シートの肘掛を上げてベッドがわりにした座席から起き上がり、窓のシャッターを上げると、恐ろしいように澄んだ星空であった。群青の空一面を、まるでダイヤモンドを敷き詰めたように星々が埋め尽くしている。これまで見たこともない美しい夜空を眺めながら、世界中がテロの恐怖におのっているこの時期に単身アメリカに渡る自分が、

誰か知らない他人のように思えて来るのだった。

二〇〇一年十月十日。私は、ミシガン州アナーバーに住む三十年来の友人であるエイリオン・ガッテン（日本古典文学の研究者）の元に、一人で向かおうとしていた。子育てが一段落し、日本語教師として人生の仕切り直しを企てており、その準備段階として、ミシガン大学の日本語教室を見学するのが第一の目的であった。当時五十一歳。今から二十年も前、世界中を震撼とさせた九月十一日の米国同時多発テロのちょうど一カ月後のことであつた。

我々の目に今も忌まわしく残る残像……。ハイジャック機がニューヨークのツインタワーに真横から突つ込む映像や、ペンタゴンの上に、ニュージャーシーの林の中に、無残に爆発炎上した旅客機の残骸。これらすべてを

ライブで見なければならなかったあの日。この一月後に単独渡米を計画していた私は、これで三十年来の夢も潰え去ったか、と胸が凍りついたのを思い出す。テレビは朝から晩までテロの映像を流し、翌日から世界の空の猛烈なキャンセルが始まった。出発の三日前、十月七日には、三十数パーセントの就航率になつていた。ぎりぎりまで迷いながらも結局決行することになったのは、自分のへそ曲がりの性格のせいである。ここまで十分生きた。子育ても終わった。それにこの非常時に、ノースウエスト機で単身アメリカに渡することは平凡な主婦である自分にとつて、ある種痛快な決断ではあるまいか、こう考えると、かえって冒険心が湧いてきて飛んでみようと思ふ心がついた。当日の関西国際空港は予想通り、ガラーンとした広い域内に人もまばらで、三〇名くらいの手荷物検査に二時間以上もか

かり、それでも人々は黙って辛抱強く順番を待った。

アメリカへの単独プチ遊学の目的は、主に三点あった。

- 一、ミシガン大学の日本語教室の見学。
- 二、当地のキリスト教会（アンドリュー・エピスコパル・チャーチ（St. Andrew's Episcopal Church））が行っている毎朝夕のホームレスへのミールサービスを体験したいこと。

三、ミシガン大学大学院図書館ハッチャーライブラリ（Hatcher Graduate Library）を利用したい、ということである。

結論から言えば、短い期間にも拘らず、大変実り多く充実した体験ができ、平時では味わえない興味深い現実にくつも遭遇した。

これらのすべてを紹介したいが、紙数の関係

で十分の一も書けないのが残念だ。

アメリカに着いて最初に意外に感じたのは、ここの人々があの悪夢のような攻撃に対して、日本ほど興奮していないという現実だった。まず、テレビは朝から晩までテロの映像を流してはいない。それよりも、大雨によるヒューロン川の氾濫のせいで一人の男性が行方不明になっている事の方が重要らしく、朝晩このニュースだった。エイリーンにしてからが、テロは遠いニューヨークの話よ、アーバーは戦略的に何もないからテロの標的にされるはずがない、と楽観的な言い方をした。それより、炭疽菌のことは、夫のチャールズとヒソヒソと話していた。この菌は微量でも殺傷能力があり、建物や飛行機の空調に撒かれると瞬く間に室内の空気中に広まり、飛行機を利用する者にとっては最重要課題だった。FBIは、テロ勃発からわずか二日後

の九月十三日には、テロの実行犯を、オサマ・ビン・ラディンを首謀者とするパレスチナ解放民主戦線 (DFJP) 18人と報道したが、アメリカの人々は、炭疽菌はDFJPとは無関係と
思っているらしかった。それは正しかった。

九・一一から七年後の二〇〇八年八月七日の日経新聞に、二〇〇一年の炭疽菌事件は、先ごろ自殺したメリーランド州感染症研究施設
のブルース・アイビンス研究員の単独犯行、と決定づける小さな記事が掲載された。普段大して新聞を読まない私の眼に、その時なぜその小さな記事が飛び込んできたのか、不思議な気がする。二〇二〇年初から始まった(一説には、武漢では二〇一九年にはもう始まっていたという) 中国を発症源とした新型コロナウイルスによる新型肺炎流行の波は、今年二〇二一年になっても、収束どころか全世界で変異種による爆発的流行の増大への脅威と

不安が急速に広がっているが、原初は武漢の感染症研究施設からウイルスが漏れ出たとの噂が出てしまうのも、可能性として、ない、
とは言い切れないからであろう。

日本での印象と異なり意外と思えた二つ目は、学生たちの真剣な勉強態度と真面目さである。映画の中のアメリカの大学生は、勉強などせず恋愛に明け暮れるイメージがあったが、Wikipedia(2006年)によると、ミシガン大学は全米州立大学の中でも合格難易度四位とレベルが高く、大学院の四割が他国からの留学生とのことである。成績もそうなら、同時に授業料も名門私立大学並みに高い。だから、自信にあふれているしプライドも高い。学生たちは外見的には地味であり、ほとんどの学生が、いつでもどこで見ても熱心に本を読んでいるか、ケミストリー棟では、数人で議論する場面をよく見た。当時の日本の

大学生がファクションの奴隷となつてゐる幼稚さと単純さを思い、将来この世代が国を動かす時代が来た時、世界と対等に渡り合えるのだろうかと何度も落ち込み、悔しくて寂しくてたまらなかつた。が、エイリーンのパートナーである元ミシガン大学教授だったチャールズ氏に言わせると、「今の学生はレベルが落ちた・・・」と、無念そうに眉を曇らせた。

日本語クラスと大学授業料

日本語クラスは五名の日本人の先生方の、主に初級クラス七クラスを參觀させていたとき、いくつかのクラスにはオブザーバーとして参加した。先生方はいずれも四十歳前後。

日本で三年以上の日本語教師の経験を積み、更にアメリカの有名大学、コロンビア大学やカリフォルニア大学の大学院を修了しておられ、どなたも優秀さが際立っていた。同時に

学生の頭の良さにも感動した。日本語クラスには留学生が多かったが、彼らは一度の説明で理解するし、矛盾があれば必ず聞き返し確実を目指す。要するに、彼らは勉強に大変熱心だ。その背景には、母国から留学資金を出してもらつてゐるとか、例えばネイティブアメリカンでも州外出身の学生の場合、当時年間27,000USドルという高額な授業料がある。現在の円に換算すると、約300万円／年となるが、これは日本の私学の医歯系学部とほぼ同額である。当時の日本の国立大学文系の年間授業料は約50万円で、私立の理系は、平均すると年間約140万円だったから、ここの授業料は破格に高額なわけである。二〇二〇年のアメリカ大統領予備選挙において、民主党のサンダース候補が、若者の公立大学無償化と同時に、すでに卒業した人々の奨学金返済免除を掲げているが、借り

たものは返さねばならないアメリカにおいては、一生返済に追われ生活苦から抜けられない人々の問題が顕在化していたためである。この卒業後の奨学金ローン返済については、日本でも最近深刻な社会問題になっている。半面、アメリカの学生は、高い授業料を自分の責任で払っていると思えばこそ、必死に勉強するわけであろう。

テロの情報と日本の様子を知るために、毎日のようにバスで二十分の大学院図書館ハッチャーのアジアンライブラリに通い、日本コレクションコーナーで、一日遅れで届く日本の新聞に目を通した。恐らく数万点を蔵するであろう日本語関係の書籍は、日本の図書館と遜色ないほどの充実ぶりである。尚かつ、二十四時間オープンしていて、誰でも、行きずりの外国人であろうとホームレスであろうとフリーパスであった。当時の日本の大学図



ミシガン大学大学院図書館の正面入口にて著者

書館は、外部からの入館に身分証を必要とした。八階建てのその巨大さは、正面入り口に立つと眩暈を覚えるほどである。正面はDIAOのある広場に面し、ここがミシガン大学の中心にあたる。

ミシガン大学には扉も門もなく、町と大学が一体となっている。この中を、学生に交じってホームレスがうろついているが、学生たちは小虫に対するほどの一瞥もない。

ホームレスへのミールサービス

教会でのミールサービスに初めて参加したのは、着いて三日目の早朝だった。チャールズの運転するホンダアコードに乗り、大きな屋根を持つ石造りの美しい教会に着くと、すでに何人かの人々が立ち働いていて、鍋から温かい湯気が立っていた。

この頃、ホンダはアメリカで高い信頼を得

ており、チャールズは最近シビックからアコードに乗り換えたところだった。ホンダに乗ることは保有者の環境への配慮を表し、一種のステータスとなっていた。

集まってくるホームレスは毎回平均して30名くらいだが、この地域に大体100名くらいはいるだろう、とのエイリートの意見だった。食事の内容は日本のわが家より豪華である。生野菜やポテト、マカロニ、スープはもちろん、ハムソーセージから数種類のパン類、肉の焼いたものがあることもある。これらはすべて市内のスーパードから寄付だとのことだった。賞味期限が切れたり余ったりしたものを、コディネーターのランディが車で回収してくる。ランディ一人だけが専従者で、他はすべてボランティアだった。

ボランティアの割り振りなどはすべてランディがやっていた。ボランティアはそれぞれ



キリスト教会 (アンドリュー・エピスコパル・チャーチ)



ミールサービスにて。エイリーン（左端）とボランティアの方々

れの仕事が決まっについて、自分の役割が済むときと帰る。だから、部外者に突発的に入って来られると迷惑そうだった。パンを配りながら観察していると、白人とアジア系が多く、毎回家族で鍋を持って来る中国人一家もいた。ここに来ることを思い出し、自分の足で来られる人はまだラッキーだ、とエイリーンが言った。ここには暖房も食べ物もあり、一日命を長らえることができるから、と。

さて、私にとって強く印象に残ったことの一つは、ミールサービスに行った日のエイリーン夫妻の食事のことである。極端に貧しいものである。ある日の夕食は、生春巻きの皮で野菜を巻いたもの一本と、パック入りのから揚げ2個。「今日のディナー」と彼女から手渡された時、理由は尋ねなかったが、人に施しをした後の人間の欺瞞心を戒める、宗教家ならではの行為ではなかったかと推し量って

いる。チャールズ氏は、この教会の司祭の一人である。

三週間のプチ遊学はあっという間に過ぎ、帰りの飛行機は、来る時の気楽さとは正反対の緊張の十二時間だった。ほとんどがカラードの女性たちだった往路と違い、帰路のアテナントは白人男性が異常に多く、女性も身長が高くきびきびしていた。航空会社の制服を着てはいるが、恐らく軍か警察関係者だったと思われる。座席の埋まり具合は、十月十日が30パーセントくらいだったのに対して、帰りの十一月一日は約70パーセント。どの人も本を読むかテレビに見入るかして周囲との接触を断ち、決して怪しまれないよう努めていた。搭乗してすぐチケットのチェックがあり、筋肉の張った目つきの鋭い男性アテナントが、チケットと見比べながら一人一人じつと顔を見つめたのは不愉快だった。狭い

座席で身じろぎもせず読書していた私には、十二時間があつという間に思えた。こうして五十一歳のプチ遊学は、いろいろな課題を残して無事終わった。あれから二十年経つ。アメリカは、異端児トランプ大統領から民主党のジョー・バイデン大統領へと移行し、アフガニスタンへの派兵打ち切り、米兵士引き上げが決まり、つけ入るように中東は、イスラエルとパレスチナ間の戦闘が再燃。未だ終わりの見えない混迷を深めている。

こんな中で、世界は COVID-19 パンデミックの禍中であり、二〇二二年五月現在、アメリカではワクチン接種が急速に進み、国民全体としての免疫力の高まりは、接種率数パーセントの日本とはくらべものにもならない回復への道を歩み始めている。

おわり



大久保利通公

生誕百九十年記念祭感慨

天台宗大雄山南泉院住職

西南之役恩讐を超えての会事務局長



宮下 亮善

鹿児島神道青年会より寄稿文の依頼をいただきました。奇しくも三島由紀夫義士50年忌当日のことでした。

福岡在住のインド人留学生いわく「現代においてもサムライの子孫は生きていると思うが、現代におけるサムライの意義とは何か。なぜなら江戸時代にはサムライにとって富みや金はあまり重要ではなく、名誉や忠誠心を重んじていた。現代ではお金が個人が生きていくのに最も重要だと信じられているから」。

この、若きインド人留学生にどのように答えられますか。『現代における武士道精神はいかに』と。

スーダンの33歳の青年が日本人青年3人と拙寺を訪問しました。彼のスーダンの青年いわく「日本人がうらやましい、神話に繋がる天皇をいただく永き伝統が。自分の国にはこのような素晴らしい文化がない。日本人はもつと誇りをもつべきだ」と。よく日本の歴史や文化にたいする理解が深く、武士道に興味を示す青年であったので、彼に問うてみた。

「君に尋ねるが、武士道とはと問われたら何とこたえるか」と質問したら、即座に『義』だと。3人の日本人青年たちは啞然としていた。『義を見てせざるは勇なきなり』義を守るために腹を切る。それが武士道だと。3人の日本人青年たちに言いました。「君たちは日本精神を彼から学んだらどうか」と。

イギリス人27歳の自然農法を学ぶ青年の訪問を受けた。日本の印象を問うてみた。彼いわく「鎮守の森」と、神と自然が一体している。伊勢の『式年遷宮』の事をも理解し、日本文化は素晴らしいと。

ミャンマー人留学生だったか、韓国人だったか、中国人だったか、はつきり記憶がないのですが、留学生に聞いたことがあります。「いま、寺まで来る間の道端に『100円』売りの無人販売所があったでしょう。どう思ったか」と尋ねたら、「僕らの国ではとても信じられない、考えられない、泥棒をしないのか」と。驚いていました。

韓国の大学生と2週間ホストファミリーとして生活しました。彼いわく、「和尚さん、日本に来るについて西郷隆盛と吉田松陰を勉強して来ました」と。それは素晴らしいことだ、まさしく鹿児島は西郷隆盛の在所。縁の

場所を案内しました。南洲墓地、城山洞窟など、最後に西郷銅像前に案内し記念写真をと思い西郷銅像をバックに写真を撮ろうとしたら、もじもじして写真を撮らせようとしなない。

「君は西郷隆盛を勉強して来たと言っただろう。遠慮はいらんからそこに立ちなさいと催促しても立とうとはしない。「ああ、そうか、『征韓論』のことか」と。「そうなんです。韓国では西郷隆盛のことを良く言わない。西郷隆盛と一緒に記念写真を撮ったら大変なことになる」と。「ああ、そうか、それなら君に問うけれども、あなた方韓国人を見て、伊藤博文を暗殺した安重根の悪口を言う日本人がいるか。西郷隆盛も安重根も私情をもって事bec成そうとしたわけではないと理解しているから批判することはしない。そこまで君が言うのであれば言わせてもらおうけれども、あの当時、日本が君の国を併合しなくてもロシアの

植民地として併呑されていたと思う。日本が日清、日露戦争に負けていたら侵略され当然のごとく植民地化されていた。それが、当時の国際情勢の大きな潮流であったし国際常識だった。それを西郷隆盛や大久保利通など維新の志士たちがそれこそ命懸けでこの日本という国を守り、列強の侵略を防ぎアジア、アフリカで唯一独立を毅然として守りとおした。だからこそ西郷隆盛や大久保利通など維新の志士たちを日本人は誇りに思っている。今に至って、君たち韓国人や中国人が過去の歴史に触れて、ことあるごとに日本を非難するけれども、非難するべきは当時のあなたがたの指導者の不甲斐なさを非難すべきである」と。

彼の韓国の大学生が帰国し手紙が届いた。「和尚さん、僕は和尚さんを尊敬する。外国人の僕にたいして、はっきり自国の主張を述べる姿勢に感動した」と。日本人は元来自己

主張が上手ではない。できるだけ相手を傷つけず穏便にすまそうとする。ある意味美德ではあるが外国人には通用しない。

以上、紹介した外国人青年たちの日本人観、日本文化への憧憬、現代の日本人が戦後忘却したことを問い詰めている。まさに、三島由紀夫の「われわれは戦後の日本が、経済的繁栄にうつつを抜かし、国の大本を忘れ、国民精神を失い、本を正さずして末に走り、その場のぎと偽善に陥り、自ら魂の空白状態に落ち込んでゆくのを見た。政治は矛盾の糊塗自己の保身権力欲偽善のみが捧げられ国家百年の大計は外国に委ね敗戦の汚辱は払拭されず、日本人自ら日本の歴史と伝統を潰してゆくのを、歯噛みしながら見ていなければならなかった。われわれは戦後のあまりに永い日本の眠りに憤った」。

『私の中の二十五年』に、「このまま行っ

たら『日本』はなくなってしまうのではないかという感を日ましに深くする。日本はなくなつて、その代わりに、無機質な、からつぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な抜け目のない、或る経済的大国が極東の一角に残るであろう」。

敗戦後、GHQの占領政策のもと『菊と刀』すなわち、天皇と武士道の連環を永遠に断ち切るこそが重要な政策課題として進められて今日にいたっている。

あらためて、明治維新百五十年をふりかえる時、その維新の志士たちは何のために戦い命をかけてきたのか、その意志をどのように次の世に語り継ぐのか、後事を託された者が考えなければならぬ事だと思ふ。平成から令和へ時代は大きく変わり、二千六百有余年万世一系の皇室の存在をどのように受け止めたらいのか、欧米列強の押し寄せる植民地

支配に対して国を挙げての抵抗運動であつたわけで、公武合体か尊皇攘夷か国内は対峙し多くの尊い命が失われた。すなわち、維新の最大の意義は皇室を護ることと欧米列強の植民地支配を排除することであつたといえる。

何故なら、欧米列強の国々は一神教的価値観を有するものであれば、1つの国に2人の国王の存在を認めず、1つの国に2つの宗教は認めない。当然彼らが信奉する価値観を強いることはあきらかである。百五十年前に列強の支配を許す事になつておれば、皇室は廃絶され元号も無きものになつていたであろうと思われる。

藤田東湖先生の『正気の歌』に「死して忠義の鬼となり極天皇基を護らん」まさに、天地の有らん限り皇室を護る気概を吐露している。西郷隆盛公もその『獄中感有り』に「朝に恩遇を蒙り夕に焚阨せらる。人生浮沈は晦

明に似たり、縦い光りを回らさずとも葬は日向かう。若し運を開く無くとも意は誠を推さむ。洛陽の知己皆鬼となり。南嶼の俘囚独生を竊む。生死何ぞ疑わん天の附与なるを。願わくば魂魄を留めて皇城を護らん」。たとえ、命は亡くなっても、魂だけはこの世に残し皇室をいつまでも護りゆかんと。捕らわれの身でありながらも、その気概を吐露している。大楠公「七たび生まれて賊を滅ぼす」。その尊皇の思いに通徹するものがある。大楠公を祭る湊川の墓前に西郷隆盛、大久保利通、坂本龍馬、木戸孝充、吉田松陰、高杉晋作、伊藤博文、など、京都、江戸往来のたびに墓前に大楠公の尊皇の忠義を我がこととして、国事に奔走したといわれている。まさに、『正氣時に光りを放す』有史以来の国家的危機を救った志士たちであった。

城山下の西郷隆盛公、高見橋の大久保利通

公、今に居ませば、この現今の日本国の有り態を、どのように眺めておられるのか聞いてみたいと思うのは小生一人であろうか。

チベットやウイグルに対する中国共産党のジェノサイド（民族大虐殺）に対し、人権非難決議もできない国会議員が、世界の平和と国家の安全保障を語る資格があるのか、その気概もなきありさまでは先人に顔向けできないものである。国は貧乏して滅んだ国はないといわれている。腐敗と誇りの喪失で国は滅びると。

『現代の日本にあつて武士道精神は有りや無しや』インド人留学生の詰問。三島由紀夫の50年前の義挙。日本が日本たるべき文化の中心に皇室を仰ぎ、その国ぶりを復興せよとの遺言と肝に銘じていきたいと。

死の淵からの生還



田鍋 一樹

私の素性

私は中西喜彦氏の義理の弟です。氏の妹の康子と結婚してすでに50余年になります。年は79歳です。前の住友金属工業鹿島製鉄所に勤務していた縁で現在茨城県鹿嶋市に住んでいます。鹿児島出身の私が鹿嶋に住んでいるのも不思議です。この度、喜彦氏に、「炉ばたセイ談」の話をされ、書いてみないかとお誘いを受けました。私が死の淵から生還したとの内容です。冊子を拝見して、鹿児島の名だたる方々を書いておられることを目の当たりにして、とても私の任ではないと辞退し

ました。しかし話題を問わずお互いの啓蒙のための会で誰でも堅苦しくない、硬軟、左右何でもありとのこと、それだったらと筆を執る次第です。

社会的には、当地鹿嶋で、NPO法人「鹿嶋省エネ研究会」を立ち上げ細々と活動しています。当時の住友金属鹿島製鉄所環境エネルギー部から、経済産業省傘下の財団法人省エネセンターに向となり長年その国際部門に勤めておりました。当時ODAの海外支援は、主に産業分野に限られており民生部門は海外では大変人気がありました。翻って日本の民生部門の省エネ意識は、途上国に比べても劣るとも優らない実情でした。結構困難な中で活動を続けているのですが、少し過労が重なっております

術

鹿嶋記念病院に担ぎ込まれ1回目の手

そのような時に家の庭の樹木を剪定しました。思わず一所懸命にやりました。いつも通り夕食を取り、炬燵に入ってしまった。いつもて妻が何度声をかけてもうつろな返事で、ちよつとおかしいと思ひ救急車を呼びました。令和2年2月28日のことでした。その後のことを私は全く記憶にないのですが、大変なことだったようです。以下は妻の入院記録に沿って記載するものです。

救急車で当地鹿嶋の小山記念病院に運びこまれました。私は意識を完全に失い治療に入ったのですが、途中3回も心肺停止状態になりました。息子夫婦と孫も病院に駆けつけました。寒い待合室で待っていました。3回目目の心肺停止の後、小生の治療について、心肺停止状態を蘇生させるかどうか、また蘇生させるとしたらそれなりに危険も伴うのとこのとで、どうするかを医者は息子に相談しまし

た。息子は何とか一命を救ってほしいと頼んだ由です。

私は完全に意識を失っている状態でしたが心肺蘇生を行い心筋梗塞の治療となりました。手術は、集中治療室に入り、今病院で手術を受ける中で一番の重症患者であるとのことで、人工呼吸器の装着と右脚のふくらはぎに血圧アップポンプを巻き血管管理を行って頂きました。手術には夜だったにも拘らず主治医の循環器科の江角先生が駆け付けて下さり若い新井先生と対応されました。冠状動脈にステントを入れる手術を受けました。左心臓の太い血管が2本、そして細い血管もガチガチに固まっているとのことでしたが、まず2本の太い血管に何とかステントを入れる手術は終了しました。

2 回目手術

3 回も心臓が停止しているので脳にどの

ような影響を及ぼしたかまだ分からない。現状は心臓の3分の1しか使われていない状況でそれだけ体は無理をしている。そして1回目の手術が終わった後、今のところ心肺停止はないが、薬と人工呼吸器でギリギリ安定している。一番悪い時より多少良くなっている。細い血管にも2か所ステントを入れるトライを3月5日行う。機械式のサポートの後心臓がより頑張らないといけないのでより強い心不全を起こす可能性がある。但し、細部の血管が働いて血液が流れるようになれば心臓も大分違うということで、家族は手術の成功を祈りました。

手術が無事終わり仰向けに休んでおりました。妻が足を下から上にマッサージしながら「お父さん、康子ですよ」と呼びかけましたが目を開けたものの見てはいないようでした。まだ人工呼吸器や足首のポンプはそのま

まであり、鼻から酸素を入れて点滴で栄養補給している状態でした。3月11日ナースと新井先生が、ベッドを囲み呼吸器を外してくれました。呼吸器が取れて酸素吸入器になり大部楽になりましたが、体中に管がはい回り長いこと人工呼吸器を装着していたせいか、口の周りの傷が痛々しい状況でした。

蘇生と入院の不思議

3月12日新井先生が来られ「ここは病院ですよ。判りますかー」と大きな声で聴かれましたが明確な反応はなく指を一寸動かす状態でした。しかしこの頃、新井先生曰く1カ月くらいして徐々に意識がもどってくる。

3回も心臓が止まったことから頭にどう影響しているかわかりませんとのことでした。集中治療室から一般病棟に移されて意識がある程度戻ってからのと思うのですが、私は実に変な思いでした。それは何で自分はここに入院

しているのだろう、あれほど元気に庭の剪定や省エネ推進活動に頑張っていたのに一体何故なのだ。と自問自答していました。そのことを康子に聞くと康子は「何言っているの、大変だったのよー」と顛末を話してくれました。まさしく死の淵をさまよっていたのだと思います。入院してから一般病棟に移るまでの約20日間のことが、天の恵みか全く記憶に無かったです。

変な夢

そしてその後不思議な夢を見続けました。夢はあまりに長く、一夜の夢にしては、内容が多すぎるのです。夢の続き物を毎夜見ていたのだろうかと思いました。そして現実の世界で、あれっ、これ夢で見たよなーという思いもあり、夢だったか、現実だったかわからなくなります。夢は、ある時は浜辺でミュージックを歌い、そして広大な農場を旅して豊

かな生活を送り、ある時は仙人に会って色々な話をしており、また砂漠のようなところの一軒家に行つて過ごした話や、海外の屋敷に滞在して家人や使用人にとてもよくしてもらったことなどで、語りつくせません。最後はいつもいかに心臓病から脱却するかという話に結び付きました。これは決して一夜で見る夢ではない。今もって不思議な気がしてなりません。

その後の生活と所感

2月28日に入院して、5月6日退院するまで68日間も入院していたのです。幸い脳障害は起こらず記憶も段々戻ってきました。退院後、散歩のリハビリを行いながら生活しています。妻はずーっと付き添ってくれています。歩く速度は妻の方が早く、ついていくのが大変です。妻からの最もつらい質問は、「あなたは何が目的で、何のために生きてい



茨城県鹿嶋市の自宅にて著者



七夕飾り：自宅の前で妻康子と

るの」と聞かれることです。これだけの経験をしていながら、なぜ生きているのか全く「これだっ」という気が起こらないのです。やむを得ず「そうさな」と言葉を濁してしまいます。

思えば意識も少しずつ回復していた頃から、妻は色々と伝授してくれました。鹿嶋省エネ研究会の報告書のこと、狩谷君や村上君がきっちり対応してくれたこと、中西さんの兄弟が大変心配してくれていたこと、鹿児島のももも相当心配して手紙などくれたこと等々です。退院して医者に診断してもらったとき主治医の江角先生が、「もう死んでいる状態で棺桶から引きずり出したのだ。あの手術は私がいなければできなかった」と話されました。私は死の淵から生還しました。九死に一生を得ました。自分はなぜ生かされたのだろう、ひよっとしてご先祖様のご守護かと、背後に

何かを感じ妻と話しつつ、今年も七夕を迎えることが出来ました。

妻の献身的な介護と入院の細かな記録にとっても感謝している次第です。

(NPO法人「鹿嶋省エネ研究会」会長)



風景日付印の面白さ



米森 寿美男

手紙を書くという文化を永く残していきたいと思うのは、私だけではないと思います。

今年、あの一円切手の肖像「前島密」翁が郵便事業を創業して一五〇年という大きな節目の年を迎えました。国策として全国の郵便局網を作り上げましたが、今では日本郵便株式会社という民間の会社となっています。これから先も利用者のために郵便制度を守って欲しいものです。

平成三十一年四月二十七日、「前島密」翁没後一〇〇年墓前祭が神奈川県横須賀市の浄楽寺において盛大に開催され、大勢の参列者

の中に加えていただき、前島密翁の功績を今一度振り返る機会を得ました。その功績は、郵便関係のほかにも、江戸遷都、国字の改良、海運、新聞、電信・電話、鉄道、教育、保険など多岐にわたるとのこと、広範な知識と構想力に敬服させられました。前島密翁は三〇歳の時に薩摩藩に英語の教師として招かれ、二年間は薩摩藩士として激動の中で鹿児島でも活躍していたと記されており感慨深いです。そこで今回も郵便局での思い出話をしてみたいと思います。

一、「レタールーム」

手紙を書くための図書館のような専用の部屋があると聞き、そこを訪れたことがあります。それは宮崎市にあるホテル・シエラトン・グランデ・オーシャンリゾートです。その中には、宿泊者専用ではありますが、手紙を書くための「レタールーム」と言う部屋が

設けてあります。手紙を書くために必要な万年筆や色鉛筆などの筆記用具、写真入の葉書便せん、封筒などが用意されており、シックなテーブルが配置され、図書館のような静かな雰囲気です。

その部屋には手紙を差し出すための木製のポストが置かれており、三つの差し出し口があります。一つ目は大切なひとへの手紙(郵便局を通して配達される)、二つ目は未来への手紙(将来の自分に向けて差し出し、何年か後に取りに来て貰う)、三つ目はあてのない手紙(みんなに読んで貰うために、室内に展示される)で、その日の気分で書いて差し出すことが出来ます。私も妻宛てに書いた手紙をお願いしたところ、郵便料金は、ホテルで負担して差し出していただけとのことでした。その郵便には、ホテルの名前が入った料金後納の日付印が押されていました。

ここの施設をプロデュースしたのは「小山薫堂」さんです。FMラジオで毎週日曜日の午後三時から放送している「日本郵便 SUNDAY. S・POST」の番組に、「宇賀なつみ」さんと一緒に出演されている方です。「小山薫堂」さんは、熊本県のマスコット「くまモン」の生みの親であり、様々な番組や地域興しなど、面白い取り組みをされています。お二人の掛け合いが実に面白いですので、ぜひお聴きください。



「レタールーム」のポスト

その番組でも手紙について、色々な話を聴くことができ、中でもオリジナルの風景日付印が楽しみであることも話されています。数年前に宇賀さんが天草にこの番組の取材に來られ、一緒に飲む機会がありました。宇賀さんは何でも飲まれるようですが、焼酎もこよなく愛される愛飲家であり、何でもござれの大酒豪でした。

二、入来郵便局の風景日付印

平成六年七月に入来郵便局長に就任して、風景日付印の制作が必要であると思ひ、その材料をどうするかと言うことから入来町を掘り起こしてみました。

転勤族として、入来郵便局長に就任したので、先ずは入来町の良いところや歴史などを勉強するために、入来町の一〇か年基本構想方針を考える会「イキイキいき未来塾」に加えていただきました。このメンバーとの出

会いが入来町での生活に潤いと色々な刺激を与えてくれ、この町の良さを会員が考えて、身近にある物をどうしたらより活用できるようになるかを考えるなど、新たに作るよりも活用する方法などを勉強させてもらいました。そんな中で入来町を二つに絞って表現することとし、一つ目は大宮神社の神舞が古くから舞われており、「十二人剣舞」の中に君が代の文句が歌われていると言う話を聞き、これを採用することとしました。二つ目は麓地区の武家屋敷群が国の伝統的建造物群保存地区の指定を受けると言うことで「入来院重朝」さん宅の茅葺門を入れてあります。三つ目は入来町の温泉です。この温泉は独特な効能があり、切り傷や擦り傷を始め、突いてきた杖を忘れて帰る程、元気になると言われていますので、これをPRすることとしました。

この写真等を郵政に送付して、平成十五年



入来郵便局の風景日付印。大宮神社の神舞、武家屋敷群の茅葺門、温泉の町を象徴する温泉マークがデザインされています。

に完成しました。なかなかの出来映えと自負していただきますので、ぜひ多くの方々に利用していただければ幸いです。

三、手紙の良さ

南日本新聞の投稿欄に、高校生が五年後の自分に宛てた手紙を書いたという記事がありました。手紙を書くことの難しさと手書きの味について、その良さを書いてありました。最近ではLINEやメールなどでほとんどの用件を済ませる様になりましたが、やはり葉書や手紙を貰うとうれしくなります。電話でも十分にお礼などを伝えられると思うのですが、電話をかけるのも気が重くなることもありま

す。その時は葉書を用意して万年筆で短く近況を書いて、郵便局の窓口で「風景日付印」を押してくださいとお願いして差し出していきます。

これを受け取った側は、自分の宛名を見たと

きに、普通の日付印と違い珍しい風景日付印を見て、すこし嬉しく思うのではないのでしょうか。

日本郵便はこの夏から暑中見舞い葉書を廃止しました。残念ですが、官製葉書に四季の絵柄などを印刷して、その時季の思いをお届けできるようにしてはどうだろうかと考えます。町内でも絵手紙教室が開催されており、郵便局に掲出してありますのでご覧ください。年賀状だけのつながりとなっている方が増えておりますが、それでも良いのかなあとと思います。

少しでも手紙を書くという文化が永く続くように祈っております。

(元入来郵便局長)



老人の意味論と

生の質QOLの寸察(一)



守田 則一

一、はじめに

令和2年の敬老の日を前にして厚労省は新聞で令和2年9月1日現在の百歳老人数が過去最多の8万450人(女性が88・2%)と報じている。ギネスワールドレコーズ社から、存命中の世界一長寿者に田中カ子(カネ)氏(2020年9月19日現在、117歳と261日)が認定されていると報道されていた。確かに日本は長寿国である。

老人とはと問うてみると、その概念は如何なる切り口で如何なる観点からそれを見るかでいろいろである。老人について我々の見

るもの聞くものの中にはすべて個性を含んでおり、その個性の一部の総合されたもの、即ちその総体であると説明がなし得るかも知れないが、それは何も意味しないとも言える。

物理学で気体論を論じるとき、理想気体を前提として論理が展開され単純化された一般式が導き出される気体論の如きものであるなら一応は納得がいくが、老人というものを前提とした仮想の老人は存在しない。しかし老人は存在する。これを議論するにはハイデッガーのいう存在了解の考えを前提とするならばアプローチ出来るかも知れない。

老人とはの問いの考察にはこれらのことをその思考の下敷きとするもの、ここでは心理学や文学の知恵を借りることにする。

二、**神様の下さった動物の寿命のQOL**
グリム童話には、「ロバは神にお願いして30歳の寿命に対して荷役のきつさから18

年減らして貰った。犬は齒の抜けた老犬の生活を嫌い12年返上。猿は子供じみた猿の歳を10年減らして貰った。それで人間にはロバ、犬、猿の減らした歳の総計40年を元来の寿命30年に加え70年の寿命を与えた。」とある。

人は人生の後半をこれらの動物のネガティブな側面をもらって、即ち、荷役のきつさ、つまり労働の辛さの18年間、齒の抜けた老いた生活の12年間、年を取って子供じみたレベルの生活の10年間を貰って、それらを寄せ集めて生命の量を増やしても、ネガティブな面のみを貰った長寿では(70歳は当時では長寿であろう)、人の生命・人生・生活の質(QOL:Quality of Life)を総括して筆者は生の質と以下呼ぶ)は低下することは必至であり、斯かる状態では生きる意味がないことを端的に物語っていると見えよう。

Jung はペルソナ⁽¹⁾という概念で人間が他者と接するときの在り方を述べている。即ち、人は社会的に求められる、あるいは期待される役割(道徳的、倫理的に正しく、社会通念的に一般的に正しいこと、よいこととされる役割)を演じようとする機能を持つ生物であると述べている。またその役割とは反対の要素を持つ所謂シャドウの側面もあるという。

人間の心の意識・無意識という二つの領域は、どちらも本当の自分である。従って、この両面は人間のバランスを保つ上にも重要であると見えよう。端的に言えばペルソナは無意識の中に存在する人間の社会的な側面のことである。歳を取ればこのバランスが次第に失われていくことは否定出来ない。結果的には、老人は所謂ペルソナ・ノン・グラタ(persona non grata、外交上好ましくない人物)として生きなければならぬの

だろか。グリムの童話で神から貰った人の70年の人生の後半は高いQOLを持った人間の生涯を全うする為に頂いた40年であらねばならない。

老化は医学では「加齢に伴う不可逆的(進行性)の生理機能減退」と定義づけられるが、医学の領域からこれを食いちぎって言うなら一面として納得がいくが、単に生理的機能の低下という観点からでは老化の実像には迫れないだろう。以下文献に見る老いの姿を。ペルソナの側面からも追いつながら考えてみる。

三、百歳の小野小町

小野小町は敢えて述べるまでもないが、生没は不明なるも平安前期(9世紀頃)の歌人、歌は柔軟艶麗、比類なき才能に恵まれた人で、仁名・文徳朝の人で絶世の美人として伝説的に伝わっている。

ここで述べるのは若き小町でなく、百歳の

小町である。高齢者の生き様は時代と共に変わり、ある意味で歴史性を持つ。しかし、その特性の本質は変わらないであろう。能に造詣の深い免疫学者多田富雄の『生命の意味論』⁽²⁾の記述の中に、高齢(百歳?)の小野小町の生き様に関連した能の話しが出てくるが、同様な物語は三島由紀夫の戯曲集の中にも同様の小野小町が登場する。筆者はこれを読んだとき、もすこしその意味を理解しようと思つたが如何せん能のことは全くの素人、何処に焦点を合わせて文献検索すべきか皆目見当が付かない。それで九州では能に造詣の深い小生の友人で鹿児島県能協会の会長中西喜彦氏に電話して、いろいろ尋ね文献⁽³⁾も送ってもらつた。それも参考に能に登場する小町を叩きに老人の生き様を考えてみることにする。

能に出てくる小町の像は作者不明の『鸚鵡

の小町』や世阿弥の『関寺小町』、観阿弥作とされる能の『卒都婆小町』のものがあるが、その原典であるとされる『玉造小町子壮衰書』(岩波文庫)の次の詩に老いたる彼女の姿、振る舞いを見ることが出来る。以下その一部を引用し考えを進める。

予(ワレ)

行路の次(ツイデ)

歩道の間

径(ミチ)の辺途(ホトリオオチ)の傍に

一人の女人有り。

容貌かじけて

身体疲瘦せたり。

頭は霜蓬の如く

膚は凍梨に似たり。

骨はそばだち筋抗(アガ)りて

面は黒く齒黄めり。

裸形にして衣無く

はぎにして履(ハキモノ)無し。

声振ひて言うこと能わず

足なえて歩むこと能わず。(略)

かの才媛の小野小町ですらこのように醜く老いていく。これはまさしく老いの姿である。

この詩は老化をリアルに描いている。

しかし、老人のかかる容貌は自然の成り行きとしても、老いたりとは言え問題は小町の精神活動である。その複雑さは、この詩を下敷きにしたと言われる能の『卒塔婆小町』にその詳細を知ることが出来る。この奥深いところは実際にその演じるところを見て感ずるべきものであろうが、そのチャンスがないので、邪道ではあるがその書かれたものから考察をする。

老いた物乞いの姿の彼女が卒都婆に腰かけているのを、高野山の聖が咎めて、彼女との間での卒都婆についての教義問答がおこなわれた。しかし、百歳になっても彼女のかつての才能は、聖をやりこめるだけの能力は未だ残っていた。物乞いの老婆小町は、若き日の才媛のプライドと知性は残されたままであるものの、自分の老いを悟れず、心理学者エリクソン等の言う絶望と統合の狭間⁽¹⁾の中で自己矛盾を起こした老人の末路が如実に示されている。これは現在の行き届いた年金と施設があれば彼女の才能は生かされ、狂乱におとしめることもなく知能の高い百歳老人のあるべき姿として新聞報道されたかも知れない。因みにその救いの役は僧の役ではなく、百一歳になっても未だ矍鑠としていた聖路加病院長の故日野原重明先生のような医師が適任であろう。恐らく今頃、あの世で未だに魂

の彷徨い続けている小町をみて、思いやりの手をさしのべて日野原先生は救済したに違いない。百歳の小町の状態は多田の言う人間社会から隔離して死に至る過程であり、生体の超システムの崩壊過程の観念で説明すべきかも知れない。それをわきまえているのは百歳老人の日野原先生である。また、生体の超システムと老化の意味論については詳しくは多田の原典を参照下さい⁽²⁾。

この老いに関連してシェクスピアの『ハムレット』(第2幕第二場)に次の記述がある。
 ハムレットが本を読みながら舞台上に登場する。ポローニアスがハムレットに向かって「なにをお読みですか」とたずねると、それに対してハムレットが答える場面がある。

悪口だよ、悪口。口の悪い奴がこう書いている。

老人とは、その髭白く、その顔皺だらけにして、目より松脂（マツヤニ）色の液体流し、知能はおびただしく退化し、あわせて膝関節に衰弱を見（ケン）するものなり。

これはたしかにうごかしようのない事実。だがこう書いてしまつてはあまりに失礼ではないかな。おまえだつてカニみたいにしるむきに歩いてみる、おれと同じ年ごろになれるはずだからな。

（小田島雄志 訳）^⑤

とある。ハムレットを通してシェクスピアは老人のイメージを述べるわけだが、所詮人は年と共にこのような変貌をとげる。シェクスピアの老人のイメージは他にもいろいろな観点から興味ある記述がみられるが、東洋人であれ、西洋人であれ、老人は同じ風貌にな

るが、ハムレットでは知能もおびただしく退化している老人としてシェクスピアは記述しているが、知能レベルには個体差が甚だしく、小町のように詩歌で頭脳を磨いた人には惚けは少なく、また知恵ある老人は小町のように記憶は消えても思考能力は消えないのかも知れない。シェクスピアの『リア王』の中に人間は知恵が付くまでは歳を取つてはいけなと言ふ台詞がある（リア王、第一幕、五場）が、逆に知恵が付いた小町は老いる権利はありそうだ。

四、老ゲエテ

ドイツ、フランクフルト出身のドイツを代表する文豪ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749～1832年）は単に文学者としてだけでなくその活動の領域は幅広い。82歳でその生涯を閉じるまでの活躍はどの分野を取り上げても一つの歴史である。ここ

で取り上げるのはそのゲーテは如何に老いていったかの片鱗を考察するにある。ゲーテがファスト第Ⅰ部を書いたのは1806年(55歳)で、第Ⅱ部を書いたのは70代になつてからである。しかも、これを書き終えた翌年に亡くなつてゐる。若きゲーテと老いたるゲーテの対比を知る都合の良い文献がある⁽⁶⁾。その中から要点を引用すると、ゲーテ33歳と78歳の時二度ゲーテに会つた女流作家テレーゼ・フーバーの手紙に次のものが残されている。

先ず、若きゲーテに会つた彼女が父親に送つた手紙には、「彼(ゲーテ)は素晴らしい人です。思ひ上がつてゐるところも、尊大なところもなく、むしろ最初は少し当惑してゐるように見えました。」人気作家ゲーテ33歳の時の身心共に充実した彼の姿が目には浮かぶ。これ以上のことは彼の精力的な作品の全てが

証明してゐるので述べる必要はない。

所が、ゲーテ78歳の印象は「ルイーゼ(テレーゼの娘)はイエーナにゲーテを訪ね、彼の様子を見てすっかり憂鬱になつてしまいました。……(略)……エゴイズムと尊大さが冷たい息を彼に吹きかけて、その精神を麻痺させてしまい、彼はへつらい屋たちのお世辞に自分をまかせています。……(略)……ゲーテの心はもう死に絶え、いまや荒涼たる幽霊のみが出没してゐるのです。」このように高齡のゲーテの外観と挙動はネガティブの老人一般と大差はないが、このとき彼はファストの第Ⅱ部を書いており、内面のゲーテとは別人格のようである。このように高齡になると身・精の乖離と更に精・心の乖離が起り、ある意味では二重人格的状态にあると言える。あるいはこれが老いていく人間の自然の姿かも知れないが、ユングのいうペルソナと

シヤドウの關係の危機状態なのである。

ゲーテと小町を対比するに百歳の白髪のやせ細った、よいよいに近い、物乞い老婆の小町は高野山の聖を教義の論戦で言い負かす高い知的能力は未だに残しており、一方ゲーテもファストの第Ⅱ部を書く素晴らしい知的能力は温存されており、二人の知的レベルは高い水準が維持されたままである。しかし、二人ともネガティブの老いを持つ醜い老人にしか過ぎない。割り切れぬものがある。ゲーテのエゴイズムの尊大さは精神の一部の崩壊の兆しであり、結果として身・精・心の乖離を引き起こしている。それは老いの宿命と言わざるを得ない。ゲーテですらこのようである。まして況や我々凡人は老の苦しみを如何に超えていけばいいのであろうか。これが出来ない場合はエリックスの言う老人のアイデンティティにおける絶望の世界をさまようだ

けなのだろうか。これらはQOLの崩壊を意味するものである。これを小野小町とゲーテの精神状態が如実に示している。

五、ヘミングウェイの『老人と海』

『老人と海』①（1952年）はアメリカのノーベル賞作家ヘミングウェイ（1899～1961）の最後の作品である、文学的価値云々は筆者のよくするところではないが、これに書かれている老人の老人たるところの在り方は、我々医療に携わるものには大変共鳴をうける。ここに少し長くなるが健全な老人の生き方を述べている箇所を二三以下に引用し、それに対する考えを述べる。

「彼は年をとっていた。メキシコ湾流に小舟を浮かべ、ひとりで魚をとって一日をおくっていたが、一匹も取れない日が八十四日もつづいた。」（略）「老人の四肢はやせこけ、項

には深い皺が刻み込まれていた。熱帯の海が反射する太陽の熱で、老人の頬には皮膚癌をおもわせる褐色のしみができ、それが顔の両側にずつと下のほうまでひろがっている。両手にはところどころ深い傷跡が見える。綱を操って大魚を捉えるときにできたものだ。が、いずれも新しい傷ではない。(略)。この男に関するかぎり、なにもかも古かった。ただ目だけがちがう。それは海と同じ色をたたえ、不屈な生気をみなぎらせていた……かれのうちには、希望と自信とがまだ燃えつきいていない。それがいま、風とともに新しく立ちかえってきた (p10)。

……いつのまにか自分は人に気がねをするようになったとおもう。同時に、それはなにもかも不名誉なことではない。本当の誇りをいささかも傷つけはしないと考えていた (p10～11)。

……故人のぼやけた写真が掛かっていたが(筆者註・先立たれた連れ合いの写真、老人はそれをとりはずしてしまった。見るにたえぬ寂寥の思いに襲われるのを恐れたからだ (p13)。

だれか話し相手がいるというのはどんなに楽しいことかが、はじめてわかった。自身や海に向かつておしゃべりするよりはずっといい。「お前がいなくて寂しかったよ」と老人はいった。(様子を見に来てくれた少年に向かつて……筆者註)……(p144)

この本の主人公老漁師サンチャゴの来し方と今ある心身の状態を的確にとらえている。ここにはかつて一流の腕を持った、妻に先立たれた孤独の年老いた漁師の失われてないアイデンティティと彼の持つ人生に対するポテンシャルは枯渇することなく健在なのである。

身体はやせこけ老いたとは言え、その未だ衰えぬ不撓不屈の生気はその海の色と同じ青い目の色に集約されている。八十四日間魚が釣れなくとも、自然と共に時間を過ごし、時間の深層に触れる事による彼自身による心のケアなのである。また、働くこと（働けることに）に於いては一生涯現役なのである。ここにも心身の乖離は老いの宿命でもあるが、貧乏暮らしとは言え漁師という天職を通しての高い生の質（QOL）を維持しており、ここに老人のアイデンティティを失わない一人の生き方と自己実現の道が示されている。ここにはポジティブな老人の一つのモデルが示されていると言える。また、それは他人の少年に尊敬される存在でもある。これが老人たるところの本態なのである。これも自然（広大な海）を相手とする老人の一つの生き方でもある。

この本は大変示唆に富み、文学的価値の議論はさておき、高齢（化）社会を迎えた現在に於いてこれは老人の一つのモデルでもあると言える。そこに子供を配することによりその境界線が明瞭になる。かれを慕うよその子供と話している内に、「かれのうちには、希望と自信がまだ燃えつきていない。それがいま、風とともにたちかえてきた。」略「いつのまにか自分は人に気がねするようになったとおもう。同時にそれは不名誉なことではない。本当の誇りをいささかも傷つけはしないと考えていた。」このように老人を支えているものが希望であり、また自信と同時に名誉と誇りに彼の精神的バックグラウンドは維持されている。これは主観的な高いQOLを持った老人であると評価出来る。即ち、機能的健康度、日常生活動作能力（ADL, Activity of Daily Life）、認知能力、時間の消費、社会的行為（独

創的リーダーシップ）等々は高いレベルにある。それは彼がどでかいカジキマグロを釣り上げた後の彼の行動が証明している。高齢者のQOLに重要である行動能が非常に高いレベルにある典型例である。

ここでこの老人の救いとして老人を心の底から尊敬してやまない少年（マノーリン）がいる。彼はまた老人の話し相手である（老人は完全に打ちのめされたことを覚った後にこれを認知する）。老人は海には友達もいれば敵もいるとのべているが、彼の身の回りには話し相手もおれば、かれを何かとサポートしてくれるテラス軒のマスター、頼まれもしないのに老人の船と道具の始末をしてくれた。ペデリコもいる。また、彼の行方を心配して沿岸警備隊は捜索したし、飛行機も捜索に参加している。社会の一員として生きる彼の人格を認めた何よりの証である。ただ彼はそれを

意識したかどうかは別の問題である。老人は自然環境の中で生きると同時に社会環境の一員として多くの人に支えられて生きているのである。

しかし、これは文学の世界の一つの理想像かも知れない。前述の物理学の理想気体論から導かれる公式に似ている。現実には、少なくとも日本の高齢社会の現実は多くの問題を抱えていることだけは事実である。

六、オールド・ブラック・ジョウ

Old Black Joe

フォスター (Stephen Collins Foster、

1826～1864) はアメリカ合衆国ペン

シルベニア州ピッツバークローレンスビルの

生まれで、アメリカ合衆国を代表する歌曲作

曲家と言える。作品は黒人歌、農園歌、ラブ

ソングや郷愁歌でそのメロディは日本人の

我々にも親しみやすい。このオールド・ブラ

オールド・ブラック・ジョウ Old Black Joe

Gone are the days when my heart was young and gay,
 Gone are my friends from cotton fields away,
 Gone from the earth to a better land I know,
 I hear their gentle voices calling "Old Black Joe".

(chorus)

I'm coming , I'm coming ,for my head is bending low:
 I hear those gentle voices calling,"Old Black Joe".

若き日 はや夢と過ぎ
 わが友 みな世をさりて
 あの世に 楽しく眠り
 かすかに 我を呼ぶ
 オールド・ブラック・ジョウ
 我也行 (ゆ) かん
 はや 老いたれば
 かすかに 我を呼ぶ
 オールド・ブラック・ジョウ

(緒園涼子 訳)

ック・ジョウ以外に我々に馴染みの深いのは「ケンタキーの我が家」「草競馬」等々を思い出す。とくに、オールド・ブラック・ジョウは戦後のアメリカナイズのはしりとして、昭和20年代の中学校の音楽教科では一つのブームであった。改めてこの曲を三番まで聴いたときオールド・ブラック・ジョウは我々自身であることを悟った。しかし聖書を持たぬ我々には a better land はない。釈迦の涅槃の境地を辿るべきであろうか。そう考える以前にまずその一番を翻訳と共に紹介するので(前ページ)、ロズさんで見てください。

フォスターの活躍した時代は日本では江戸時代、まだ、世界に門戸は開かれていない時代である。日本の人口増加が明治時代に入ってから徐々に問題になる以前のことであり、アメリカでも高齢化社会が問題にならない時

代の Old Black Joe の歌である。従ってまだ長寿化が問題にされず、人口増加も、少子化問題もない時代の老いた人のものと言える。

まだ日本では「人生50年化転の内に比ぶれば夢幻の如くなり」の時代的背景をもつ頃のアメリカの老人の老いの心境の歌である。また、この歌の背景は日本と違い、新大陸に於ける伸び盛りのアメリカの中での「我も行かん、はや老いたれば」の人であり、年齢的比較は出来ぬが、老いの訪れは同じである。ただ背景となる宗教はアメリカはプロテスタントの国である。自ずから a better land は日本のベターランドではない。聖書にいうベターランドである。即ち、宗教的背景をもつ彼等の a better land である。それは一神教の保障する天国であると考えられる。しかし、ここではこのベターランドの議論でなく、老いを如何に捉え、老いを迎えた人の心境がかくあ

ると言うことが問題なのである。ここに見る
 老いたひとはベターランドには友がいる。も
 しや連れ合いも。ここで一番問題なのは

Gone are my friends from cotton fields

away,

である。友はみないなくなってしまうている
 状態で、残された彼は話し相手がいない、最
 悪の場合一人暮らしの状態であることである。
 かかる状態は老人のQOLを著しく損ねる。
 上述の老人と海の場合、話しかける相手に、
 老人を慕う子供がいる。また、子供と一緒に
 仕事をしようという話しは、楽しくもあり、
 一つの生き甲斐でもある。

しかし、ここでは幾分その側面が削がれて
 いる。かすかに我を呼ぶ声は聞こえれど、老
 人としてまだその日その日になさねばならぬ
 ことが山積している筈である。それがプロテ
 スタントなら神に対する奉仕であらうし、神

を持たぬ我々は老人としての生き甲斐の探求
 であろうか。

七、おわりに

筆者は後期高齢者と言われるようになって、自分はどうあらねばならないか、自問自
 答した。先ず高齢者とはどんな人と言うのか、
 その定義は何だろう、単に行政が年取った人
 を何らかの目的で把握する為の便宜的区分か
 らのみ議論しても何ら人間の本質とは関係の
 ないことではないか、その区分の背景には歳
 を取るとはどういうことか、老人とは、老化
 とは、老いとは、といったことの裏付けがな
 くては意味がないと考えた。高齢者は医学の
 領域では老人医学という学問体系があるが、
 過去概念では全て言い尽くすことは出来ず、
 日々書き換えられる運命にある。ここで医学
 以外の先人が如何なる視点からそれを捉え、
 解釈したかに興味を持ち、筆者も改めて資料

を集めた。ここに述べたことはそれらの断片である。これらの資料を通して体系的なものが言えたわけでもなければそんな大それたものをしようと言うのでもない。この論考はほとんど先へ続く。ここでは紙数の関係で一つの区切りとして纏めたに過ぎない。続きはまたの機会に譲りたい。従って、ここには何らの結論はない。

老いて病み、恍惚として人を知らず

(頼山陽、日本外史)

この状態を如何にして余命から少なくし、質の高いQOLを維持するか、それが医学の一つの課題であり使命と思うだけである。最後に卒塔婆小町の文献等数編を送ってくれた中西喜彦博士に感謝する。

(もりた内科・胃腸科クリニック院長)

【参考文献】(必要最小限にとどめた)

- (1) ユング (高橋義孝、森川俊夫、訳) … 心理学的類型Ⅱ、p224、人文書院、1987年
- (2) 多田富雄、生命の意味論…老化―超システムの崩壊 (p165―187)、新潮社
- (3) 広田種三郎・能・謡曲の心、卒塔婆小町、p339―341、1977年 (中西喜彦氏私信)
- (4) E. H. エリクソン、J. M. エリクソン (朝長正徳、朝長梨枝子訳) …老年期、みすず書房、2007年
- (5) 小田島雄志…シエクスピアに学ぶ老いの知恵、幻冬社、2003年
- (6) 柴田翔…宇宙の生命―老ゲート (p211―217)、2019年、人文書院
- (7) ヘミングウェイ、老人と海 (福田恆存訳)、新潮文庫

地域づくりと景観保護



奈良迫 英光

一、はじめに

13年ぶりに鹿児島市に居を移し驚いた。以前は居間から桜島が見えたのに、ベランダの端に行かないと全体像を見ることが出来ない。明らかに家の周りに大きな建物が建ち、景観が損なわれている。

鹿児島市を訪れた観光客は、まず城山の展望所から桜島の遠望と市街地を望む人が多く、日に7回変化すると言われる桜島の姿に感嘆の声をあげる。市街地に近くて、錦江湾のような海から直接聳える火山は世界的にも珍しい。

城山の展望所は高台にあることから桜島を遮る建物はないが、市街地の景観は毎年変化している。高層ビルが増える一方で空き地や大きな原色の看板、のぼり旗も多くなっている。文化ゾーンにおける建物の高さ制限や原色・広告の規制などが必要である。

二、木造駅舎の魅力

県内には築100年を超える木造の建物が残されており、その代表的なものが、JR肥薩線の「嘉例川駅」と「大隅横川駅」である。かつては地域の象徴であり、軍人達が万歳三唱の音頭で戦場に旅立ち復員し、高度成長期には中学、高校を卒業したばかりの若者が涙とともに旅立って行った場所で、昔の良き思い出を残し、心の豊かさを彷彿させる場所である。

両駅とも、「はやとの風」が運行開始された時、無人駅に特急が泊まる駅として、全国

的に有名になった。駅舎は天井が高く、柱や梁、銚がむき出しになり、時の長さを感じさせる。

春は桜、夏はひまわり、秋は紅葉、冬はスイセンの花が咲き、訪れる人の心を慰めてくれる。いつまでも残したい風景がそこにある。

三、武家屋敷の活用

県内には「伝統的建造物群保存地区」が残っている。江戸時代、薩摩藩では鶴丸城（鹿児島市）を本城とし、領内の各地に外城と呼ばれる行政区画を設けて、それぞれに地頭仮屋を設け、その周辺に「麓」と呼ばれる武士集落をつくった。代表的な場所として、「出水」「入来」「知覧」で、各武家屋敷と街路の両側に築かれた石垣や生垣、木々が落ち着いた街路景観を醸し出している。

開放している武家屋敷や庭園も多くなり、地域の魅力発信にもつながっている。庭園を

活用した野点や灯りの祭典は、武家屋敷に似合うイベントである。これから大規模な土地利用の転換を図る再開発事業では、歴史的景観が残る地区をどのように整備していくかが課題である。文化財、古民家、古木などは残すか移設する方向で取り組み、一方では周辺の住民にも理解を求め、のぼり旗、広告物の撤去など美しい景観保持が求められる。

四、「黒川温泉」の取組

黒川温泉は高度成長期から阿蘇や別府温泉に押されて観光客の通過地点となり、寂れた温泉地となった。そこで温泉旅館の主人であるGさんを中心に、地域を挙げて景観に配慮した地道な街づくりが進められた。

黒川温泉全体を「一つの宿泊施設」として位置付け、「道路は廊下」、「旅館は小部屋」のコンセプトで各施設も取り組んだ。温泉街の入り口の看板は、黒字に白文字で20数軒の



伊仙町（鹿児島県大島郡）石垣、阿権集落の看板



鹿児島県日置市美山地区の標識

旅館の名前が書かれており、上品で高級な雰
囲気を醸し出している。

施設の屋根は黒瓦、柱は黒、壁は黄土色に
統一されている。人工物を押し、庭木は雑木
林の自然体である。「自分のところだけが儲か
ればいい」のではなく、「黒川温泉全体の施設
が栄えるように助け合う」という精神のもと
に協調が図られている。取り残された温泉地
が、今や九州を代表する観光地となっている。

五、農山村地域の活用

今地方では、モータリゼーションの発達、
人口減少に加えて高齢化が進み、商店街はシ
ャッター通りに、農村部では利用されない田
畑が増え荒廃が進んでいる。戦後は多くの
人々が農村地域に住み、田畑の開墾、米や野
菜の収穫などをしながら地域コミュニティが
図られてきた。

田舎の風景は、自然を相手に川の流れや風

向きを計算して作られ、先人たちの知恵が活
かされており、訪れる人々の心を癒してくれ
る。荒れ放題の沿道を整備し、駐車場やトイ
レ等の整備を行い、美しい景観を守ることが
持続可能な地域となる。

しかし構造改善事業等により、水路から藻
魚、貝、とんぼなどの生物がほとんど姿を消
している。棚田やため池の保全、水路には石
積を利用するなど川の生物が住める環境に配
慮して欲しいものである。

ヨーロッパでは、ドイツ、フランス、イタ
リア、スイスなど地方の美しい農山村地域に
観光客が訪れ、グリーンツーリズム等を楽し
みながら長期滞在している。

北海道の「美瑛」、「富良野」の田園地帯は、
植え付けから収穫まで景観に配慮した耕作に
心がけ、四季折々の美しい自然の姿は観光客
の人気の場所となっている。美瑛の丘は「パ

ツチワークの路」と呼ばれるエリアがあり、従来からそこに立つ木々は「セブンスターの木」や「ケンとメリーの木」、「親子の木」などの愛称が付けられ、CMの舞台にもなっている。文部唱歌や校歌に歌われた田舎の風景こそ貴重である。これからも自然の摂理を大事に美しい農山村風景を守りたいものである。

六、魅力ある観光地づくり事業

県では「魅力ある観光地づくり」を進めており、平成18年から毎年10億円（1カ所1億円程度）の予算を投入し、美しい景観づくりに努めており、「地域が推薦した箇所」等を審査して重点的に整備している。

長島町、薩摩川内市、出水市、離島、錦江湾沿線の市町村、離島を始め県下全域で景観整備・保護が進んでいる。自治体の財政が厳しい中、積極的に応募して良好な景観整備・保護に努めてもらいたい。

七、これからの地域づくりと景観保護の取組

日本人の国内旅行や消費は成熟し、旅のスタイルは多様に变化している。日本の原風景が残り、地域ならではの「体験」、「食」、「文化」を楽しむ散策できる地域が人気となる。

地域づくりは住民、事業者、行政の協働が大切であり、住民の合意形成を図ることが不可欠である。特に街づくりをリードする公共空間の整備が重要になっている。

ナビの普及で過度の案内標識は不要になっている。沿線の観光看板は統一したデザインで、連続性を持たせることが分り易い。案内板の大きさ、形や色に配慮した集約化が美しい景観を保つこととなる。

美しい自然が残る離島では看板を無くし景観を保護することが魅力の島となり、そのことで島の価値が高まり来島者も増えると考



湯布院（大分県）の自動販売機



小布施町（長野県）の「葛飾北斎館」の入り口

えている。

「道」は貴重な観光資源である。電柱の地中化を進め、沿線に四季の草花を植栽し、古木は残し、橋やガードレールの色は周りの環境に配慮するなど工夫が求められる。

沿線の川の法面は殺風景なコンクリートではなく、石やレンガ使い、水藻が生え魚の住む清流への環境整備が望まれる。博物館や美術館、図書館等の文化施設は、プロムナードを草花の植栽で、明るい雰囲気を出したい。入りたくなる環境づくりが求められる。

八、おわりに

景観保護と経済活動との共生をいかに図るかが問われている。保護から経済効果創出という視点で武家屋敷を活用し、「薪能」「歌舞伎」「文楽」「野点」「灯り」等の文化的行事を四季の変化に合わせて開催することで誘客が図られ、後継者養成、地域の活性化にもつ

ながると考える。学校でも「景観保護の重要性」を低学年から学ぶ機会を提供しなければならぬ。欧米に比較すると景観保護に対する取組が遅れている。

良好な景観は地域の個性（魅力）を伸ばし、日々の生活の一部となる。住民が我が街の魅力を語ることが誇れる街となる。

「景観」はそこに住む人々の「心」を映す「鏡」であると信じてやまない。

秋日ざし 明るき町の、こころよし

何れの路に 曲がりて行かむ

く窪田 空穂く

（元鹿児島県観光プロデューサー）

《参考資料》船瀬俊介・著『日本の風景を殺したのはだれだ』（溪流社）

謡曲のなかの九州王朝

梶原 宣俊



「女郎花」「龍田」「芦刈」「弱法師」「国栖」「小野小町」「桜川」の謡曲に九州王朝の名残を指摘している。

一部を紹介すると、「鶴亀」（喜多流では「月宮殿」）は、猿楽の原本を典拠としたもので、謡曲の中には西暦六百年代の古いものが含まれていると指摘されている。これは、新春中国の朝廷で四季の節会の事始めが催され謡われたもので、私も新春には必ず謡うものである。この中に「官人駕輿丁、神輿を早め」という文言がある。この駕輿丁は福岡県若宮町に残っている地名である。若宮町は私の母の里であり、私も訪ねた時に「駕輿丁」という奇妙な地名が残っていることに不思議な気がした記憶がある。

著者の新庄千恵子さんは、東京在住で長年謡曲を学ばれ、同時に古田武彦の「古代史研究会」で学ばれた方である。古田武彦の「九州王朝説」に基づき、つぎのような謡曲に九州王朝の名残を指摘されている。

それは「鶴亀（月宮殿）」「淡路」「弓八幡」

一、はじめに

二〇二〇年の春、出水市図書館で偶然このタイトルの本に出合った。

私は、能謡曲を二十年やっているのでこのタイトルに魅かれたのである。早速読んでいくと、きわめて興味深いものであった。

新庄は、九州王朝が香椎宮へ参拝したときの謡ではないかと指摘している。博多千代の御殿へと向かい「長生殿へ目出度く還御」と

謡はなっている。私は福岡出身なので千代町も香椎宮もよく知っている。新庄は、鶴と亀は、松梅ともに九州王朝の象徴（謡曲「老松」にもでてくる）であったと推測している。

同様に「淡路」という謡曲は、紀の國は佐賀県北部、伊勢志摩は糸島、淡路島は博多湾の能古島と考えると非常にわかりやすいと述べている。

新庄は、この謡曲の原作者は九州王朝における歌謡詩人であり、白村江の敗戦より前の人で、記紀成立を知らない人物であったという。「大八洲」とは、伊弉諾・伊弉冉の創った四つの陸地と四つの海のこと、それはみな九州にあったと述べている。

「紀ノ國」は佐賀県北部のことであり、和歌山が紀ノ國と言われるようになるのは、記紀編纂後七二〇年以後であると指摘している。

「伊勢・志摩」は筑紫の糸島で、「日向」は筑

紫の日向（福岡県高祖山、日向川あり）で、淡路島は博多湾にある能古島であると述べている。能古島は、私も行ったことがあるなじみの島である。

謡曲「蘆刈」は佐賀県の芦刈で、さらに万葉集は九州で歌われたものが多いことを古田史学が証明しつつある。確かに、そのような視点で謡曲を読むと理解が深まると感じた。

同様に、謡曲「弓八幡」に出てくる「高良の神」は福岡県久留米市の高良神社であることを指摘している。

後半は、「通説」を疑い、古田の九州王朝説や「古事記」に基づき、近江は「淡海」であり、淡路、淡路島も博多湾のことであると述べている。さらに「紀ノ國」とは佐賀県のこと、卑弥呼はその紀氏の姫であった等々驚くべき内容である。私はこの本を通して「九州王朝説」に関心を持ち始めた。

二、古田武彦の九州王朝説

私は、古田武彦の九州王朝説を知ってはいませんが著書は読んだことがなかったので膨大な著書の中から数冊を買い求め読んでみて驚いた。

古田は高校教師で、いわゆる学者ではない。しかし、彼の本は学者顔負けの緻密さと客観的論理性にあふれていた。私も、これまで近畿の大和王朝説を素直に信じていたが、読んでみると「九州王朝説」の説得力に圧倒された。私は学校で学んだ「日本書紀」の話をうのみにしていたが、確かに当時の政府権力が天皇制の正当性を証明しようとしたものではないかという多少の疑問は持っていた。私は、古田を通して日本の古代史に関心を深め、「九州古代史の会」に入会した。

以下、素人なりに古田の「九州王朝説」を要約してみよう。

古田は「魏志倭人伝」や「随書」「新旧唐書」等の中国文献を徹底的に読み込み、「古事記」「日本書紀」の創作を指摘している。その論説は実証的かつ論理的であり説得力がある。そして、紀元前から七世紀末まで日本を代表した政権は一貫して九州にあったことを論証している。

九州王朝の始まりは、後に天孫降臨として神話化される出来事であり、天孫降臨の舞台となった場所は福岡県の糸島周辺である。また九州王朝の前には出雲王朝が存在しており、国造制・部民制の原型は出雲王朝時代から存在していた。

神武天皇は一世紀から二世紀頃に実在しており、神武東征も基本的に史実である。九州王朝の分家として大和王朝（近畿天皇家）は成立したと述べている。

倭王卑弥呼は、伊都国に都し、倭国は福岡

平野の奴国を中心にしていた。卑弥呼は筑紫君の祖であり、倭の五王も九州倭国の王である。筑紫君磐井は、九州の王であり、継体は九州南部の豪族熊襲隼人で、筑紫磐井の乱は九州倭国に対する反乱であったという。大宰府は、六一八年から九州倭国の滅亡まで、九州倭国の都であり、日本最古の風水の四神相応を考慮した計画都市であった。

「白村江の戦い」では、九州倭国の王が捕虜となり敗北した。「壬申の乱」は、畿内ではなく九州を舞台としており、畿内の豪族大海人皇子（天武天皇）が介入し、日本列島の覇権を得た事件である。

戦乱により九州の豪族は滅亡し、畿内に天皇（高市王子）は移った。

「大化の改新」は、草壁皇子の子と中臣鎌足が九州年号の大和（大化）元年六九五年に、藤原京で高市天皇とその子を暗殺し翌年に文

武天皇が即位した事件である。

「神武東征」は、六世紀に任那滅亡による難民の一部が九州から畿内に東征したものである。通説で飛鳥時代と呼ばれている時代まではヤマト王権はまだ日本を代表する政権ではなく、畿内の地方政権にすぎなかったが、文武の時代に九州倭国から政権を完全に奪い「日本」と呼ばれるようになった。

「古事記」「日本書紀」は、九州倭国の歴史書であり、「続日本紀」は天武朝の歴史書である。記紀に記されている天武系の天皇は、天皇ではなく畿内の地方豪族である。記紀に記されたその他の天皇は九州倭国の天皇であると述べている。

したがって、万葉集の歌も八世紀までの古いものは、ほとんど九州で詠まれたものであるという。

以上が古田九州王朝説の簡単な要約であ

るが、私にとっては「目からうろこ」の衝撃的なものであった。

私は、歴史が好きで多少は勉強してきたが、江戸、近代史、現代史ばかりで古代史については全く無知であることに気づかされた。これから古代史の闇に挑戦してみたいと考えている。

三、幻の筑紫舞

古田武彦は「よみがえる九州王朝」の中で、最後に「幻の筑紫舞」について詳しく触れている。

筑紫舞は、筑紫傀儡子と呼ばれる放浪の民が古来から伝えてきた神事芸能である。私は言葉だけは知っていたがその内容については全く無知であった。

古田は、西山村光寿齋という筑紫舞の初代宗家と出会い、筑紫舞に九州王朝の名残があることに注目した。筑紫舞は、放浪の芸能集

団として現在まで伝承され、今様、能、狂言、人形浄瑠璃、歌舞伎舞踊等の芸能の原点である。現在でも、毎年一回福岡の大濠能楽堂で上演され、宮地嶽神社でも奉納されているという。私は、コロナが収束すればぜひ見に行きたいと思っている。

古田は、西山村光寿齋に直接会い、話を聞いている。それによると、筑紫舞の中心になる舞は「翁」という舞で三人立、五人立、七人立、十三人立があるという。師匠の菊昌校からは七人立までを伝えられたという。それは肥後の翁、加賀の翁、都の翁、難波津の翁、尾張の翁、出雲の翁、夷の翁の七人で舞うもので、肥後の翁が主役になるという。このあと、延々と古田の九州王朝説を裏付ける筑紫舞の話が続くのであるが、私は、「翁」という舞の名前に驚いた。

実は、謡曲の中に「翁」という一風変わった

た能が存在するのである。これは能の中でも特殊なもので、意味不明の文句が続き、他の能とは全く趣を異にしているのである。まさに神の舞という神聖な能である。私は、福岡時代に山笠の最終日に早朝から櫛田神社に赴きこの「翁」を師とともに謡っていた。山笠の終わりを締めくくると「鎮め能」である。筑紫舞についてはまた稿をあらためて書きたいと思っている。

四、おわりに―わが愛する「九州の自然と歴史」

私は、北九州の八幡区香月で生まれ、飯塚市の立岩小学校に2年通った。今回、その近くに立岩遺跡があることを知り、コロナが終息すれば、六〇年ぶりに訪ねたいと思っている。

三年、四年は父の転勤で長崎県北松浦郡小佐々町の小学校に転校した。

初めて海を見た。自宅も学校も海の見える小高い丘にあり、私は学校から帰ると釣り竿をもってほぼ毎日魚釣りに行った。魚釣りは生涯の趣味となった。海が大好きな人間になった。平戸に近いリアス式海岸でよく釣れた。海辺を走るバスに乗り、小学校に通った。

五年、六年は再び福岡県粕屋郡久山町の小学校に通った。それから高校まで福岡に住んだ。大学は熊本に行き五年住んだ。四年生の時大学紛争で休校になったので、休学して憧れの東京に遊学した。

卒業後は、広島、福山で教育の仕事を三〇年余経験した。定年退職後は。妻の故郷である鹿児島県出水市に住み着いた。七十五年の人生のうち半分以上が九州である。九州七県のうち、大分宮崎以外はみな住んだことがある。

私は九州の大自然を愛し、歴史を愛し、人

間性を愛してきた。九州人は、おおむね人情熱く、あつさりした性格で、行動力があり私の気性によく似あっている。

そこで改めて九州の歴史と風土を学ぼうと考へ「九州の風土と歴史」(山川出版社)を読んてみた。この本は専門的でありながらとても分かりやすく書かれている。九州の自然と歴史を学ぶには最適の書であり、九州人にとって必読文献ではなからうか。九州の深い歴史と自然があらためて身に染みだ。

私は九州で生まれ、育ち、死ぬることを心からありがたく思っている。残された人生を最後まで、九州にこだわっていききたいと願っている。

(出水喜多会主宰)



《参考文献》

- ・「よみがえる九州王朝―幻の筑紫舞」古田武彦 (角川書店一九八三)
- ・「邪馬台国はなかった―解読された倭人伝の謎」古田武彦 (朝日新聞社 一九七二)
- ・「盗まれた神話―記・紀の秘密」古田武彦 (朝日新聞社一九七五)
- ・「失われた九州王朝―天皇家以前の古代史」古田武彦 (朝日新聞社一九七三)
- ・「九州王朝の論理―日出ずる処の天子」古田武彦 (明石書店二〇〇〇年)
- ・「古代九州王朝の謎」荒金卓也 (海鳥社二〇〇二)
- ・「孤高の人・菊邑検校」西山村光寿斎 (市民の古代第十一集一九八九年)
- ・「九州の風土と歴史」川添昭二・瀬野精一郎 (山川出版社一九七七)

国歌・君が代の源流を探る

— 歴史を訪ねる旅 (15)



下土橋 渡

著者の自宅から車で20分足らず走った隣町の薩摩川内市入来町に大宮神社という神社があります。その神社の鳥居の近くに次の様に書かれた看板が立っています。

「君が代」発祥の地

ここ、大宮神社に昔から奉納されている神舞の中で「君が代」を歌います。

これが明治三年に歌い始められた国歌

「君が代」の基になったのです。

入来町郷土史研究会

一方、神奈川県横浜市中区に妙香寺という日蓮宗の寺院があります。この寺は国歌・「君が代」発祥の地として知られており、境内にその石碑が建てられています。

薩摩藩は、1869年(明治2年)に日本で初めての近代的な軍楽隊である薩摩藩軍楽隊(通称、薩摩バンド)を設立しました。薩摩バンドは妙香寺を寄宿舎とし、当時横浜に駐屯していた英国陸軍第十連隊第一楽隊長のジョン・ウィリアム・フェントンの指導を受けていました。その頃、日本にはまだ国歌がなかったためフェントンは国歌の必要性を説き、歌詞があれば作曲しようかと問いかけます。それを受けた、当時薩摩藩歩兵隊長であった大山巖は、自分の愛唱歌だった薩摩琵琶の『蓬萊山』の歌詞の中より『君が代は千代に八千代にさざれ石の巖いわおとなりて苔のむすま

で』の部分を選んで、フェントんに作曲を依



『国歌君が代発祥之地』の石碑
(横浜市・妙香寺) ①

頼します。フエン-tonはさっそく曲をつけ、1870年(明治3年)に薩摩バンドによって初演されたのです。すなわち、横浜の妙香寺の石碑は、国歌・『君が代』初演の地の石碑なのです。

さて、鹿児島県の片田舎の神社で昔から奉納されていた神舞の中で君が代が歌われていたことが、明治3年の国歌『君が代』の成立にどのようなつながって行ったのか、歴史の接点を探ってみたいと思います。

一、入来

鎌倉時代に関東の豪族として現在の東京・渋谷に城を持ち、また相模の国(現在の神奈川県)に勢力をもっていた渋谷氏の男子5兄弟が、宝治元年(1247年)に、鎌倉幕府から戦勝の褒美として北薩摩の地を与えられて下向しました。

入来(現在の薩摩川内市入来町)の地に入った渋谷氏は、入来院と名乗り、居城として山城・清色城を築き、その清色城を背景に山裾に近世の地頭館(お飯屋)を置きました。東を流れる樋脇川との間の平地を中心的な武家集住地として集落が形成されました。その旧武家集住地は平成15年(2003年)に国の重要伝統的建造物群保存地区(武家町)に選定されています。

入来院氏は、16世紀中期頃に島津の軍門に下りますが、近世は島津大名家御家門の一



庶流入来院家の茅葺門



旧武家集住地の屋敷割り

つに数えられ、明治維新までの620年余りに渡つてその社稷しゃしょくを全うしました。

二、大宮神社と入来神舞

鎌倉時代以来入来院の総社として、産業生産、縁結の神として郷民に厚く尊崇されて来ているのが大宮神社です。祭神は大己貴命(また、大物主命、大国主命とも)、近江国坂本に鎮座する日吉神社の支社として祀られて来た神社で、明治4年(1871年)以来は郷社とされました。

その大宮神社では毎年、例祭(11月23日)と大晦日に独自の神楽・入来神舞が奉納されています。古代入来隼人の隼人舞と、中世に相模国から下向してきた渋谷氏が伝えた上世雅楽、並びにその後流入した出雲神楽などが混和されて、現在の演劇的入来舞が生まれましたといわれています。舞は種類によって異なりますが、1〜12名の男女で構成され、

楽は太鼓1名、笛1名です。演目は全部で36番まであり、それぞれ5種の神楽曲のいづれかを使って舞われます。演目を大別すると、古代以来の攘災呪術的舞(巫女舞・火の神舞・剣舞等)、稲作儀礼に関する舞(杵舞・田の神舞等)、岩戸神楽舞(天岩戸の神話劇)の3つに分けられます。

36番中の22番の『十二人剣舞』は、中央鬼神が、剣を持った白装束の12人の舞人に天照大神の由来を説く岩戸神楽舞で、この舞中で舞人が左手に太刀を持って登場し、鬼神の前に出て『君が代は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで』と声高らかに朗詠します。この舞で登場する12人剣士(現在は地元入来町に在住の小中高校生が舞っています)は、奈良時代の前後にかけて、隼人族が皇宮12門の警衛にあつたことから、衛門隼人を象徴しているとされています。



大宮神社 (2013年1月1日撮影)



十二人剣舞 (大宮神社、2012年12月31日撮影)



十二人剣舞（大宮神社、2012年12月31日撮影）

三、君が代の原歌

君が代の歌詞の原歌、いわばオリジナル・バージョンとして知られているのが、10世紀に編纂された『古今和歌集』（905年〜912年頃完成）に収録されている次の短歌（巻7・賀歌・343、読み人知らず）です。

わが君は千代に八千代にさざれ石
の巖いわたとなりて苔のむすまで

〔現代語訳〕

わが君は千年も八千年も長生きして
下さい。あの小さな石が大きな岩に成
長して、その岩に苔が生えるまで。

賀歌とは、祝いの気持ちを表した歌で、古今和歌集をはじめ、勅撰集部立ての一つとして、特に長寿を祈る歌が多いとされます。す

なわち、このオリジナル・バージョンは、わが君（私の主君）の長寿を祈る、いわばバーズデーソングだったわけです。

ところが、古今和歌集から約100年後の『和漢朗詠集』（1018年頃成立）の鎌倉時代初期以降の版本においては『わが君』が『君が代』となっているものが多いとされます。すなわち、時代の潮流で『わが君』という直接的な表現が『君が代』という間接的な表現に置き換わったのではないかと推測されています¹。そして、入来神舞の『十二人剣舞』にも『君が代は千代に八千代に・・・』の歌詞が取り入れられたのでした。これが、日本国歌『君が代』の成立につながっているのです。言い方を変えれば、『君が代は千代に八千代に・・・』を歌う入来神舞の『十二人剣舞』の存在がなかったら、国歌『君が代』の成立もなかったということになるわけです。

四、薩摩琵琶

鎌倉時代の初めに中島常楽院（現鹿児島県日置市吹上町）を建立した宝山検校をはじめとする中島常楽院の歴代の住職によつて弹奏された琵琶を源流として、室町時代になると薩摩盲僧から『薩摩琵琶』という武士の教養のための音楽がつくられ、しだいに語りもの的な形式を整えて発展していきました。

薩摩琵琶は16世紀に活躍した薩摩の盲僧・淵脇了公がときの領主・島津忠良の命を受けて、武士の士気向上のため、新たに教育的な歌詞の琵琶歌を作曲し、楽器を改良したのが始まりだといわれます。

伊作島津家（現在の日置市吹上地域の一部）の10代当主・島津忠良（1492～1568年）は、日新齋にっしんさいの号で知られ、『島津家中興の祖』と称され、人間としての履み行うべき道を教え諭した『いろは歌』の創作で



薩摩琵琶発祥の地・中島常楽院
(鹿児島県日置市吹上町) (写真上)
と薩摩琵琶 (写真左) ②



も有名です。
その儒教的な心構えを基礎とした忠良の教育論は、孫の四兄弟・義久、義弘、歳久、家久に受け継がれ、その後の薩摩独特の士風と文化の基盤となったといわれ、『いろは歌』の精神は後の薩摩藩士の郷中教育の規範となり、現代にも大きな影響を与えているといわれています。

五、薩摩琵琶歌『蓬萊山』ほうらいさん

薩摩琵琶歌『蓬萊山』は、日新齋が作詞して、淵脇了公に曲を付けさせてできたもので、祝言・戦勝その他の慶賀すべき祝いの席で歌われる、いわゆる賀歌となりました。以後、薩摩の武家屋敷で慶賀の席には付きものの曲として歌われ、いつしか、それが伝統となり、明治に入っても、この琵琶歌を歌えない薩摩藩士はほとんどいなかったといわれます。

そして1869年(明治2年)に当時横浜に駐屯していた英国陸軍第十連隊第一楽隊長のジョン・ウイリアム・フェントンに国歌の必要性を説かれ、歌詞があれば作曲しようという問いかけられた、当時薩摩藩歩兵隊長であった大山巖は、自分の愛唱歌だった蓬萊山の歌詞の中より『君が代は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで』の部分を選んで、フェントンの作曲を依頼したのでした。

蓬萊山 (作詞：日新齋／作曲：淵脇了公)

目出度やな君が恵みは久方の光り閑(のど)けき春の日に不老門を立ち出でて四方(よも)の景色を眺むるに峯の小松に雛鶴棲みて谷の小川に亀遊ぶ君が代は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで命ながらへて雨塊(あめつちくれ)を破らず風枝を鳴らさじと云えばまた堯舜(ぎょうしゅん)の御代も斯(か)くあらむ斯程(かほど)治まる御代なれば千草万木花咲き実り五穀成熟して上には金殿楼閣豊を並べ下には民の竈(かまど)を厚うして仁義正しき御代の春蓬萊山とは是とかや君が代の千歳の松も常盤色変わらぬ御代の例には天長地久と国も豊かに治まりて弓は袋に劔は箱に蔵め置く諫鼓(かんこ)苔深うして鳥もなかなか驚くようぞなかりける

六、歴史のつながり

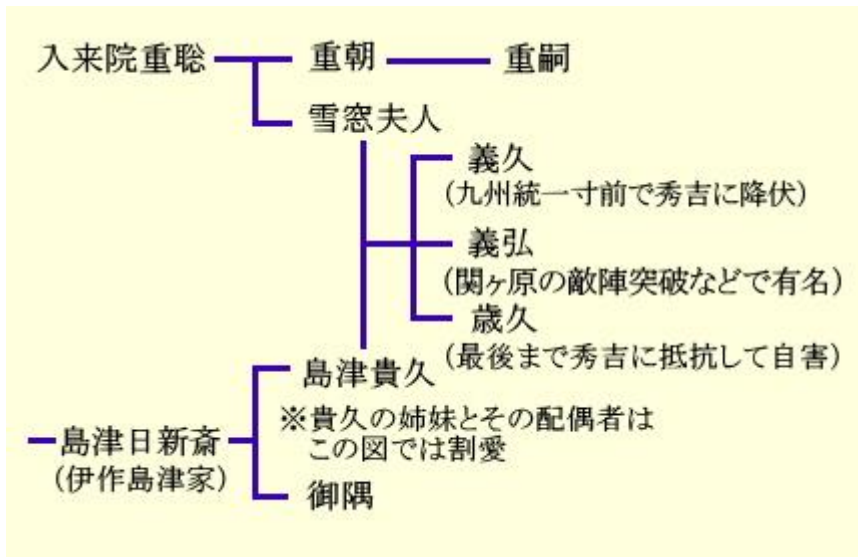
では、1870年（明治3年）に横浜で初演奏された国歌・君が代と入来院大宮神社の神舞の中で歌われる『君が代は千代に八千代に・・・』とは、どう結びつくのでしょうか？

島津家と入来院家の婚礼

島津宗家は、第12代当主、第13代当主が早世し、第14代当主・島津勝久は若年だったため弱体化していました。そこで、勝久は島津忠良（日新齋）を頼り、忠良の嫡男・島津貴久を養子に迎えました。

貴久は大永7年（1527年）に島津氏第15代当主となりましたが、正室だった肝付兼興の娘が亡くなると、入来院11代当主・入来院重聡の娘（雪窓夫人）とせつそうぶじんを継室に迎えました。

雪窓夫人の継室入りは、忠良の所望によるものだったと言われます。雪窓夫人は、島津



系図（島津日新齋 — 入来院重聡）

四兄弟といわれる貴久の男子四人のうち、島津氏第16代当主となり九州統一の寸前で豊臣秀吉に降伏した島津義久、関ヶ原の敵陣突破などで有名な島津義弘、最後まで秀吉に抵抗し自害に追い込まれた歳久の3名を産みます(前ページの系図を参照)。

祝言の席で

入来院重総は、娘と貴久の祝言の席で入來の祝い舞である大宮神社の『十二人剣舞』を披露しました。そして、その舞に何度も出てくる『君が代は千代に八千代にさざれ石の・・・』という和歌を、日新齋がいたく気に入り、自作の『蓬萊山』の歌詞の中に取り入れたというのです⁽³⁾。

七、初代・君が代

1869年(明治2年)に当時横浜に駐屯していた英国陸軍第十連隊第一楽隊長のジョン・ウィリアム・フェントンによって作曲さ

れた『初代・君が代』は、翌明治3年に横浜妙香寺において薩摩バンドによって演奏されたのですが、メロディーが洋風であり日本人に馴染みにくいものだったため普及せず、楽譜が改訂され、明治13年(1880年)に現在の君が代が誕生しました。

(元九州職業能力開発大学校教授)

【参考にした図書とサイト】

- (1) 君が代ーウイキペディア
- (2) 薩摩琵琶ーウイキペディア
- (3) 小田豊二著『初代「君が代」』(白水社、2018年4月)

